

目次

3
頁

スマホ片手に

9
頁

梟と鶲

2
1
頁

シロイハナ

3
5
頁

きもだめし

ジ
ョ
ー
ズ

松葉円

涼葉千里

ロータス

タナカ

声なき歌姫と砂漠の剣

5
5
頁

きもだめし

1
0
2
頁

奥付

ジョーズ

スマホ片手に

「何してるの？」

そう尋ねられて、僕の心は一瞬にして歓喜に湧く。まさか彼女から話しかけてくれるなんて！

イヤホンをはずし、勢い口を開こうとして、返

答に困った。

質問の意図は明らかだつた。どうしても聞かなくてはならないことではないだろうけど、質問するに値する行動を取つているのだろうと、実際に質問されて思つた。まさかここで、帰るための電車を待つてゐるだとか聞かずとも明白な答えは期待していなかつた。

言葉に詰まつたのは、この行為を満足に伝えられるかどうか自信がなかつたからだ。一言で済ますのでは納得してもらえないだろうし、かといって冗長な説明では飽きられてしまう。

「スマホゲームしながら、音楽を聞いて英単語覚えてる」
なるべく素つ氣なくならないよう注意しつつ、一息に言つた。

「見れば分かるよ。一つに集中したら？」
その言葉を待つてゐた。これで会話が続けられる。僕はオートプレイ中のゲームをズボンのポケットに、単語帳を学生鞄にしまいながら答えた。

「時短だよ、時短」

「そうそう」
何分、今の高校生活には時間がいくらあつても足りない。

授業の予習復習は元より、小テスト対策や宿題といった必須課題や、クラスの話題に乗り遅れなための最新の芸能情報のチェック、そして流行りのスマホゲームのイベントの消化と、やることが山積している。帰宅部の僕でさえこんなに忙しいのだから、運動部員なんかは宿題くらいしかできないんじやないかとさえ思う。

そんな時間に追われる現状を打開するために、自宅がそこそこ遠い僕は、できることが限られてる電車内での時間を最大限活用しようと、この平行作業を実践しているのだ。

音楽は最近でてきたものをイヤホンで聞き流し

ていればいい。スマホゲームはレベルが高いから画面を見ずに適宜タップする作業と化している。

実質意識は殆ど単語帳に向けられているので、それらを同時に扱うのは難しくなかつた。

「ふうん、じやあ一見三つのことを同じくらい意識しているように見えるけど、本当は英単語の勉強くらいしか意識しなくてもいいってことなのね」

「そうだね。ただ、聞き流して音楽はループ再生してるから放置してもいいんだけど、ゲームはたまに意識して操作しなきやいけない。まあそれだけでいいから楽だけど

「うんうん、なんかそういうことをする気持ち、わかる気がする」

説明の途中に来た電車に揺られながら、彼女との会話が弾む。電車内ではなるべく静かにと言わ

れてたけど、それを言つた彼女がこうして聞いてくれるんだから問題はないはずだ。ああ、幸せだなあ。

そんな幸せな時間もいつまでも続かない。電車が止まる。もう彼女が降りる駅についてしまつた。これでまた明日になるまで会えなくなるなん

て嫌だなあ。

「それじや

彼女は電車の外に。

「待つて」

僕もまた電車の外に出て、彼女の腕を掴んだ。

「えつ、どうしたの？」

「あ、その」

口ごもる僕の背後で、ドアの閉まる音を聞いた。こうなつたらもう、引き返せない。

「その、家の近くまで、送るよ」

もう少し彼女のそばにいたくて、なんとかひねり出した言葉に、彼女は目を伏せて頷いた。照れているのだろうか。そうに違いない。だつて僕はこんなにも顔が熱くなつていて。

彼女の後を追つて改札を抜ける。定期圏内だから料金は発生しない。財布を戻すとき、スマホ画面にGAME OVERの文字が浮かんでいた。どうやらオートプレイでなく、ある程度僕からも操作しないとクリアできないステージだつたらしい。けれど今は、はてしなくどうでもよかつた。

僕は彼女の左、車道側を歩く。こうして隣で歩

いているけれど、とても彼女の顔は見れなかつた。できの悪いロボットみたいに、両手足を不器用に動かしながら歩く。

「寒いね」

話題に困つて、そんなことしか言えない。返事はなかつた。目だけ動かして窺うと、彼女は上着のポケットに手を入れて俯いている。

「……手、繋ぐ？」

この言葉を吐くのに三十秒の時間が必要だつた。彼女と一緒に歩ける貴重な時間だけど、勇気を出すためには必要な時間だつた。それでもかつこ悪く震えた声になつちやつたけど。

「……」

彼女は無言で左手を出した。

ああ、今日は何ていい日だろ。勇気を出して

本当に良かった！

僕は内心狂喜乱舞しながら、壊れ物を扱うがごとくゆつくりと、慎重に彼女の手に触れ、弱く握つた。

「…………あつたかい、ね」

「ん……」

彼女は視線を右下に向けている。僕も気恥ずかしくなつて、顔を左上に向かた。

彼女の姿を見れない分、意識は彼女との繋がりに、今まさに彼女の左手を握っている右手に集中している。

彼女は何を思つているだろ。僕みたいにドキドキしているのかな？

ちらと彼女に目を向けると、まだ顔を背けていた。可愛い。

右手も暖めてあげたいな、と僕は思つた。

あとがき

僕は高校生の時も文芸部だったのですが、その際他の高校の文芸部と作品を出し合う大会がありました。うちの部は毎年関東大会に進出しておりました。僕は一度もいけたことありませんでした。が。ともかくそういった大会で小説（というよりショートショート）を書いて発表するといったことがあつたわけですが、当然分量制限がありまして、二段刷りの紙二枚に収まる程度の作品でないといけなかつたわけです。短いなりに起承転結をまとめる力を養えたのかななどと思つております。したが、今回はそれを思い起こし、僕のパソコンではタイトル含め本文が丁度2ページに収まるよう書いてみました。うまくまとまつてますかね？

さて、この作品についてですが、アイデアは電車の中です。特にこちらから操作する必要のないスマホゲームをする場合、時たま飽きてきてもう片方の手で別のことをするということがままあります。それを基に何か書いてみるかあと思い

至り完成したのが今回の作品となります。ちなみに殆どスマホで書きました。携帯小説ならぬスマホ小説です。

内容について。あとがきで作品の捕捉をするというのは禁忌ということではさらっととなぞる程度に留めます。今回は男性一人称視点で日常を綴つたものでした。そろそろ女性視点で書いてみようかな。日常系の作品を書く場合のネタはできるだけ身近な体験からすべきかと思いつつ大抵大部分を想像で構成してしまう僕にしては珍しく身近なものからとつてきた作品なので、ああこういうのあるある（などと思つて頂けたら幸いです。ちなみに作中の男の子の幸せな感情は百パーセント想像です。妄想です。

それでは今回はこの辺で失礼いたします。お読みいただき感謝感激です。ではでは、ジョーズでした。

松葉円

1

「いや、郵便を取りに行つて来る
「全然気が付かなかつたわ」
「耳が良いのは取り柄だから」

かんかんかんかんと踏切が鳴る。ごーっと勢いをつけて電車が走り去つて、きいという軋んだ音と共に遮断機が上がり、みーんみーんと蟬の声が戻つて来る。私の手元の麦茶がからんと揺れて、時おりその存在を主張する。

私の夏はこんな音でできている。

かたん、と聞き慣れない音がした。郵便受けに物が落ちる、懐かしい音だつた。もう何年も聞いていない気がする。手紙は——年賀状も結婚式の招待状も含めて——すっかり廃れてしまつていた。私は積極的に手紙というものを守つていこうとは思はないが、手紙を受け取るのは嬉しかつたことをまだ確かに覚えている。そして、時計ほどきつちりしていない郵便配達を基準に、午後という間延びした時間を二分していたことも。

縁側で突然立ち上がつた私に妻が声をかけてくる。

「どうしたの？」

京子、と妻の名前を呼ばうとしたが、彼女はそれより早く私が帰つてきた気配を察して息をのん

私はちょっと童心に返つてわくわくしながら玄関の戸を開けた。熱気が塊になつて押し寄せてくる。この暴力的な暑さをなんとか凌ごうと日陰を踏んで郵便受けまで歩く。私と植木のかげふみといつたところか。

郵便受けは錆びついていたが、なんとか開けることができた。

そして、私は入つていた封筒に触れたときに直感した。この封筒は黒だ、と。嫌な予感で心臓が煩い。

帰りはまつすぐ炎天のもとを最短経路で歩いた。じんじんと頭皮へ刺さる熱はもう気にならなかつた。

だ。彼女の反応をみて、自分の手にあるものが黒封筒であることを確信した。夢であつてくれ、という願いは空中に空虚に舞つていく。

「何も書いてない……黒封筒」

私の手から封筒を受け取り、京子は恐る恐る開封する。

「何も入つてないわ」

話の通りだ。私が父親から聞かされた突拍子もない話。都市伝説の類だと思つて誰ともこの話をしたことがなかつた、もちろん妻ともだ。

——宛先も差出人もない、空の黒封筒が届いたら、自分の子供を殺せ。封筒は燃やせ。

「ただの質の悪い冗談だよ」

「ええ、そうね」

上手く笑えているだろうか。胸の奥に湧き上がる嫌な予感を隠せているだろうか。

疑問に思わないこともない。彼女が思つてゐる黒封筒の意味と私の思つてゐる黒封筒の意味は果たして同じものだろうか、と。もちろん確認する

のは簡単だ。だが、彼女がただの悪戯だと思つてゐる可能性もある以上、迂闊なことは言えない。私のことを危険思考な人間だと思われても困るし、私が話すことをきっかけに彼女が殺人に手を染めるのも困る。つまるところ、私は十年近く一緒にいる他人が次にどのような行動を取るのか予測しきれないのだ。

「黒封筒について、ご両親から何か聞いていないかい？」

「それは……い、言えない。言えないわ」

些か不自然な質問だが、それに對して京子は驚くほどの動搖を見せた。

「聞いているんだね？」それは、……どんな内容だつた？」

長い逡巡の後、彼女は重い口を開いた。

「だ、だつて嘘ですもの……私は……」、殺さないわ

「やつぱりそうか。私も同じだよ」

少しだけ、安堵した。

「お、同じつていうのは？」

「どんなことがあつても飛鳥を守る」

「え、ええ、そうね」

互いにこれ以上話をしたくなくて、自然と背を向け縁側に戻ろうとする。

「封筒も始末しておいてくれ」

彼女の手に渡った黒封筒はそのままになつていったので、頼んでしまう。

「分かつたわ、水に流すわね」

背筋がぞわつとした。え、と聞き返さなかつた自分を褒めてやりたい。咄嗟に肩が跳ねたりしていないだろうか。

彼女は黒封筒に私とは違う意味を持つている。

それが分かつた。
麦茶はぬるくなつていた。

2

夫が黒封筒を持つて帰つてきたときは、息が詰まるほど驚いた。描いていた線がぐつと太くなつてしまつた。こういうことがあると、朔弥が絶対に作品を覗かないことがありがたくなる。この絵の緻密な線の中で、不意に太さと勢いの変わつた線は目立つ。

——宛先も差出人もない、空の黒封筒が届いたら、自分の夫を殺せ。封筒は水に流せ。

これが私が母親から教えてもらった内容だ。どうやら夫は娘を殺せ、というのが黒封筒の内容だと思い込んでいるようだ。うつかり殺さない、などと口走つてしまつたが、対象が誰なのかまで漏らしてしまわなくてよかつた。彼は飛鳥を守る、と言つた。朔弥が人を殺せるほど残忍な男だとは思わないが、事実として伝えるべきだとは思つた。そして万が一の時には、彼女を守ろうと心に決めた。

私は没になつたギャンバスを取り外し、さんざんと輝く太陽を見て張り直すのは諦めた。次の作品のアイディアでも考えようかと思つたが、脳内は先ほどの黒封筒のことでいっぱいだつた。

私の中で想像が先行して、縁側で動かなくなつた夫とソファで動かなくなつた娘が私を見ている。死んでいる、意志などとつくになくなつたただの物体なのに、その二対四つのビー玉は私を見ていて

る。咎めるでもなく、恨むでもない。その無表情さは死者らしい、という点においてとても自然である。

結婚する前に一度だけ、朔弥のサングラスの下を見せてもらったことがある。彼の瞳は光を反射して、きらきらと輝いたが、死んでいた。動かな目は不気味でしょ、そう言って彼は濃いサングラスで両目を覆つてしまつた。生きた人間の中に死んだものが埋め込まれている、それは私にとって羨ましいことだつた。機能しない器官を持つて、それは勝者の証ではないのか。そんな言葉が喉まで出かかつたが、無神経じやないのと一般常識がそれを押しとどめた。あまり気にならないけれどね、という当たり障りのない返事でその場を締めた。

【ただいま】

がちやりという音と一緒に飛鳥が帰つて来る。

私は、未だ手に握りしめたままだつた黒封筒を慌ててばらばらに分解した木枠と画布の山に押し込んだ。

「おかえり、飛鳥」

上手く笑えているだろうか。胸の奥に湧き上がる嫌な予感を隠せているだろうか。

「あれ、今日は絵を描いてないの？」

「失敗、しちやつてね」

「ふうん。お母さんでも失敗するんだ。私、絵は描けないから本当にすごいなつて思うけど」「普通に生活するには要らないスキルだと思つよ。今日は学校で何をしたの？」

ちつとも会話に集中できない。目を輝かせながら楽しそうに報告する娘の話の内容は、右から左へと流れていつてしまつ。

「そうだ、飛鳥。見て欲しいものがあるの。ちょっと付いてきてくれる？」

話の流れをぶつた切つた私に少し怪訝そうな顔をしたが、彼女はぴょこんと跳ねるように立ち上がつた。

【ただいま】

「何があるの？」

「見てのお楽しみ」

無邪気な笑顔を見ると、何があつても守り抜こうと決意が新たに湧いてくる。縁側と居間は空間

としてつながつてしまつてゐるので、私の自室に移動する。流石に戸を隔ていれば、話の内容までは聞こえないだらう。感づかれてしまうのは仕方ないと捉えるしかない。基本的には誰もいれない空間に物珍しそうにしていた彼女は私の表情を見て、居住まいを正した。

「お父さんには内緒の話なんだけどね、空っぽの黒封筒が届いたの。しかも宛先はないのよ」

「朔弥は、それが届いたら子供を殺せつてお父さん、飛鳥のおじいちゃんに教えられたんだって」娘は黙つて自身の三つ編みの先を弄つていた。

「そう……」

「朔弥はそんなことしないって言つてるし、私もいるから大丈夫だと思うよ。だけど理由はよく分からぬし、不用意に怖がらせて悪いけど、あの時知つてれば……つてなることだけは避けたいからね」

情報の非対称性は売り手買ひ手の間で問題にされることが多いが、実際はどんな状況においても成り立つてゐる。幼い彼女に聞かせたくはないが、

それは私のエゴでしかなく、彼女が身を守るのに何の役にも立たない。

「そう……お母さんは、おじいちゃんから何か聞かなかつたの？」

これが十歳の女の子の持つ洞察力として平均的なだらうか。私が娘と同じ年くらいのときは、夕飯のおかずと友達と遊ぶことを中心に世界が回つていたような気がするのだが。現在ちょうど二十歳より若い子は、教育プログラムの大改革以降の世代だ。彼らの物事の理解力は眼をみはるものがあるし、それを自分の尺度で捉えることはかなり難しい。私は本当のことを話すことにした。きっと嘘を吐いてもバレてしまう。

「私は……お母さんから夫を殺せつて意味だつて教わつたの……もちろん、そんなつもりはないけどね」

「それなら……お父さんは嘘を吐いているかもね」

「え？ どういうこと？」

飛鳥はそれなら、と言つた。今の話に明確な因果があつて選択した言葉だとしたら。

「お父さんはおじいちゃんから、妻を殺せつて教

えられているかもよ」

どくん、と心臓が嫌な音を立てる。その可能性は考えなかつたが、ありえない話ではない。

夫も娘もよく分からない。それをなかつたことにしてしまえるだけの詰まつた線を描かなくては、と思つた。何を埋めるのかは自分でも分からない。

3

お母さんの部屋で衝撃的な話を聞かされた。驚

きはあつたが、一般的に求められる裏切られたと憤る気持ちは微塵もなかつた。ただ正しく対処しないと面倒くさいことになるなとは思つた。

お父さんが嘘を吐いているのでは、という鎌かけにお母さんはあつさり反応した。それなら両親で殺し合いが起きることになるが、私には関係ない。もちろん流れ弾に当たるよう巻き添えを食らう可能性はあるが。

もう一つ有力な可能性としては、お母さんが嘘を吐いているパターンだ。この場合、私は家に入る間一人に命を狙われる」とになる。残る可能性は、本当のことしか言つていなか

るいはただの悪戯、といったところだろうか。嫌がらせだと思うのだが、もし万が一違つた場合は備えて状況は把握しておこう。

私は自室のベッドに仰向けに体を投げ出した。スプリングでふわりと沈む感覚が心地良い。私は自分に想像できない可能性が無限にあるのを実感しながら、それでもあまり他の可能性を考えなくていいのは知つている。お父さんもお母さんもどうに成人しているからである。

二十年前に政府主導で大規模な教育改革が行われた。内容は実に簡単で、コンピュータからの逆学習がメインに据えられるようになつたことだ。その方法は、日常生活においてなくてはならない存在になつた拡張現実に、過去のデータを一瞥できるように表示しておくだけである。それの何が効果的なのかと半信半疑だった政府高官を尻目に、教育は目に見える形で成果を挙げた。情報の取捨選択の速度の改善は、大きさに言えば人間の在り方を徐々に変えていくことになつた。

つまり、受けた教育によつて二十年前に一度人間は分断されているのである。そこに血の繋がり

があろうとあまり関係はない。まだ過渡期の世代

だから個人差があるが、直に淘汰され画一的な人が出来上がるのだろう。コンピュータが出る最適解を元に学習する以上、到達点が似通つてくるのは当然とも言える。この世代が裏をかこうと自論

んだ場合、ほとんど全ての可能性を候補にいれてくるから逆に行動が読めない。

お母さんが裏をかこうと画策していたとしても、逆学習済みでない世代であることを考慮さえすれば、裏をかいた結果はいくつかの予測可能なパターンの中に納まる。

ただ、祖父母四人と両親が健在なのはどこか矛盾していた。そもそも人を殺せ、という伝言の拡散力はとても低い。

大規模な感染症を引き起こすウイルスは別に致死率が極めて高いわけではない。保菌者が死んでしまつたら意味がない以上、ほどほどのこところで手を打つ必要がある。

そしてもう一つ、どうやつて配達したのかという問題も残っている。封筒は足のない無機物なのだから、誰かがポストに配達したのだ。

私はばつとベッドから起き上がった。

上がり框に引っかかった靴に少しいらいらしながら、玄関の戸を開ける。クーラーで冷えた体で屋外に出ると、外の景色が暑さでゆらゆらして見えた。

庭師のおじさんは多分今日はいないし、誰かボストのそばにいないかと思つて出てきてみたが無駄足に終わりそうだ。

「飛鳥ちゃん、どこかへでかけるの？ 気を付けてね」

そうだ、宏斗さんは庭にずっといたかも知れない。宏斗さんというのは、うちのお庭が素敵だから絵を描かせてほしいと三か月くらい前にやつてきた美大生だ。時おり庭で姿を見かけると、こうして声をかけてくれる。

「ううん。ねえ、宏斗さんはいつからここにいたの？」

「ん？ ええっとね、お昼過ぎからいたかな。いや、暑くて暑くて……溶けちゃいそうだつとよ。今は随分ましになつた。どうして？」

「郵便配達の人、来た？」

「郵便？　いや、今日は裏庭にいたから分からないな。何か待ってるの？」

「いやそれならいいの。ありがとう」

宏斗さんに手を振つて別れる。収穫は何もなかつた。まあ小説ではあるまいし、そんそん簡単に目撃情報が手に入るわけもない、そう自分に言い聞かせる。

違和感だけが積もり積もつて、暑さで溶けることもなく陽炎のように揺らめいていた。

4

朔弥さんに飛鳥ちゃんから郵便について聞かれたら知らぬ存ぜぬの一点張りで通してほしいと頼まれてすぐ、僕は彼女を庭で見かけた。試すような気持ちで声をかけると、彼女はピンポイントでそのことについて問うてきた。

普段は年相応にここにこ笑つているのに、今日は真剣な眼差しをしていた。まっすぐに澄んだ空気を纏つているのが印象的だった。

「北野です。飛鳥ちゃんに声をかけられましたよ。ねえ、一体何があるんですか？」

「ああ……えっと、その、すまない」
朔弥さんははつきりしたことを何一つ言わずに、一方的に回線を切つてしまつた。謎は深まるばかりだ。彼は僕の大学で教鞭をとつてゐる水原先生と旧知の間柄だということもあってあまり強く出られない。

僕が昼間、裏庭で写生していたのは本当のことなので、飛鳥ちゃんに嘘は吐いていない。ただ彼の態度は不審だった。

「北野さん」

今日はよく声をかけられる日だ。一言も発せずに絵だけ描いて帰る日もあるというのに。

「京子さん。どうかされましたか？」

「何のお話ですか？」

「え？」

「え？　飛鳥から、北野さんが呼んでいたと聞い

たのですが……」
おかしい。僕は京子さんに話はない。飛鳥ちゃんが何かをでつちあげていることが分かる。

「いや……」

僕は呼んでないです、そう続く言葉を寸でのと

ここで飲み込んだ。朔弥さんとのやり取りを経て、

飛鳥ちゃんの肩を持とうと思ったから。あの子は、母親にも父親にも隠れて何かをしようとしているという確信があつたから。

「すみません、急ぎではなかつたんですけど……昨日、すごく風が強かつたじやないですか？ それで飛んできたんじやないかなつてものがあつて……見てもらえますか？」

「あら、わざわざありがとう」

すらすらと嘘が飛び出す自分の口に失望しながら、彼女を裏庭に案内する。飛鳥ちゃんが一人で何をしようとしているのかは知らないが、あの十歳とは思えぬ頭脳の女の子は上手くやっているだらうかと無用な心配をした。

5

お母さんに宏斗さんが用があると言つていたと伝えた後、私は迷わずキャンバスの下を探した。失敗だと自分で思つても、それが味だと評価されることもあるしねと笑うお母さんはほとんど絵の描き直しはしない。だから分解されたキャンバス

を見たとき、すこし意外だなと思つたのだ。

帆布のガザガザした質感の中で紙を手探りで見つけるのは簡単だつた。ゆつくりと手を引き抜けば、掌に黒の封筒があつた。これがお母さんの言う黒封筒なのだろうか。縁側に腰かけるお父さんの背中が見えるので、きっと私がいることは気づいているのだろうけれど何をしているのかまでは分からぬだらう。

宏斗さんがどこまで気づいているのか、どれくらいお母さんを引き留めてくれるか分からぬので逃げるよう再び自室に戻る。

封筒には何も書かれておらず、ただの真っ黒な封筒だつた。不気味だとは思うが、何の意味も持たないようにも思える。

とりあえず証拠はこれしかないので封筒をスキンして、私は驚くことになる。

そこには蜜柑液と明礬液で別の内容が書かれていたのである。もちろんこの短時間で成分分析ができるわけではないので、正しくは過去に蜜柑液・明礬液で書かれたものと比べた結果似ているので蜜柑液・明礬液で書かれた可能性が高い、と

いうべきなのだが。コンピュータの学習の方が賢いのだから、素直に信じて話を進めよう。蜜柑液で書かれていたのはこうである。

——君が子供を殺さなくてはいけない理由は、君自身のためである。子育てを終えた前の世代は、次の世代にとって不要だからである。次の世代はいざれ君を殺す。そのための自己防衛である。

明礬液で書かれていたのはこうである。

——君が夫を殺さなくてはいけない理由は、君自身のためである。子育てを終えた前の世代は、次の世代にとって不要だからである。次の世代はいざれ君を殺す。そのための自己防衛である。

この封筒に隠された内容を二人が知らないならば、お父さんもお母さんも何か積極的に行動を起こすとは考えにくい。私は自分の命の心配はしないでいいと判断することにした。ほんの少し、体から力が抜ける。

ただ、これの差出人いうつすらと心当たりができた。彼らの男と女、親と子に対する考え方が一般的なものでないと良いと思う。幼稚な願いだけれど。

涼葉千里

シロイハナ

「おはよー！」

ガラッと勢いよく扉を開け放ち、少女は大輪の花のような笑みを浮かべ言つた。朝いちの挨拶は欠かさず、それがこのクラスの標語だ。高校生にもなつて随分ガキくさい標語もあつたものだと皆思つたが、二つ大きなテストを乗り越えた頃には皆これを恒例行事として受け入れ、毎朝毎朝元気な挨拶がやまびこか何かのように飛び交つていった。

けれど、今日は何かがおかしい。

「……おはよう？」

訝しがりながらも笑顔は崩さず、少女は繰り返す。

しかし、誰からも返つては来ない。どころか誰一人少女の方を見てすらいなかつた。

「ねーみんなどうしたのさー？」

教室の扉から一番近い机など歩いてたかだか数歩ほど。聞こえないはずはないというのに、やはり何も返つてはこない。

これは何かおかしい。とは言え教室の一歩手前で延々立ち尽くすわけにもいかない。ひとまず荷物を置いて、それから周りのやつらにもう一度聞けばいいか。そう思い直し一步踏み出した瞬間。笑みが枯れ落ちた。

代わりに咲き誇るは一輪の花。

少女の机に飾られた、真っ白な一輪の花だった。

さて、どうしたものだろう。というかこれ、どういう状況なんだろう。ホームルームも始まり一応は席に着いたものの、先生の話はどこも引っかかるところなく通り抜けていった。ごめんね先生話なら今度ゆっくり聞くよ。

こでんと首を傾げた少女の目に映るのは、白い花。それは何度瞬きをしてもすかしてみてもはたまた狐の窓なんてのをやつてみても変わりはせず、無理な格好をして指を痛めるだけに終わつた。

しかし指の痛みと引き換えに、分かつたことがある。この花は見間違いでも幻覚でもオカルト的なものでもなく、ちゃんと現実に存在しているものらしいことだ。

だとしても、なぜ花が机に置いてあるのだろう？ それも真っ白な花。

「……いたずらだよね？」

ひとりごち、花瓶ごと花をじけようと前を見る
と、斜め前の女子と目が合つた。
ねえ、これ置いたの誰。いたずらにしてはやり
すぎでしょ？

言おうとして口を開いたが、それは彼女の予想
外の行動に遮られた。

彼女は合った視線を即座にそらすと、俯き、ふ
るりと肩を震わせたのだ。凧いだ水面に投じられ
た石。その波紋は広がり、いつしか皆同じように
肩を震わす。

彼らの顔は見えない。けど分かった。

皆、皆、笑つていたのだ。
そして少女はふと気づいた。

これは世に聞く「いじめ」というやつなんじや
ないか、と。

だろう。だが、まだ確信には至らない。白い花：
：はいたずらとして、無視は本当に気づかなか
つただけ、そして皆が笑つていたのは別件かもし
れない。

あまりに希望的な観測ではある。けれどこれだ
けでいじめと断るのは被害妄想が強すぎるよう
な気がして憚られた。

「まさか、ね」

ぽつりと漏らした声に被せるように授業開始を
告げる鐘が鳴る。いつもならば鐘の音が止むか否
かといつたころには寝落ちる少女だったが今日に
限つてはぐるぐると渦を巻く思考に睡魔も飲み込
まれたようで、寝起き以上に目も頭も冴えわたつ
ていた。

そしてそのせいで、いやそのお陰でと言つべき
だろうか。少女は気づいてしまった。
自分の手元にプリントが届いてないことに。
前で、

〔三枚とも裏表ちゃんとあるか確認してね」
考えてみれば机の白い花や無視なんて古典的な、
いつそ陳腐ですらあるいじめのテンプレと言える
も何も一枚たりとて紙はない。あるのは例の花

くらいのものだ。

「先生、プリントないです」

わりかし大きな声で言つたが、都合の悪いこと

にほぼ同時に前列の男子生徒が馬鹿騒ぎを始め、

一番後ろの席に座る少女の声はかき消されてしまつた。一枚余つたと申告するものもなく、仕方な

く席を立ち教卓まで向かうも、やはり先生の注意はそちらに向けられ、少女の方など見向きもしない。

「先生、プリント、ないんですけど」

それでもやはり聞いてはもらえず、どうしようかと視線を逸らせば教卓の上にプリントがきつちり二枚置かれていた。おそらく予備か何かだろう。

「これ、もってきますよ」

確認もそこそこに三枚を順番にとつて、すれ違う机々を目の端に映しながら急ぎ足で戻る。

しかしその足は少女の席を目前にして、ピタリと止まつた。振り向き見るのは、ちょうど前の席。その机の上には、まぎれもなくプリントが二セツト置いてあつた。

まさか、自分の分を、止めていた？

驚愕して見つめる視線に気づいたのか、彼女は口の端をゆるりと持ち上げた。

「なんだ、つまんないの」

死刑執行の合図。それは小さな笑みと共に、静かになつた教室にひつそりと響いた。

それから授業の中身はもちろん、その日をどう過ごしたかすら少女は覚えていない。ただどの授業でも配布物は少女まで届くことは無く、休み時間もまるで少女が教室を彷徨う幽霊にでもなつたかのように、それはもう当然の如く無視されたことだけははつきりと覚えている。

懸念は確信に変わつた。

けれどだからと言つて何かことを起こそうとは思わない。今回のようなことは初めてだから、慣れているとは言えない。けれど奇異の目で見られることは少女の境遇ではままあることだつたからだ。

「からかつてくる子はね、相手が反応するのを見て楽しんでるんだよ」

小学生のころ父がいないことをからかわれ泣いて

ていた少女の頭を優しく撫でて、母は言った。

「だから言い返したり、泣いちやつたり、そんなことしちやダメ。徹底的に無視するのが一番。そ

うすればそのうち飽きてやめるから」

それからは母の言葉に従いからかいの声も何も完全に無視するようにしたら、いつの間にやらそれらはピタリとやんでいた。みんなが家庭の事情を理解できる年になつたこともあるとは思うが、母の言葉通りにしたおかげでもあると少女は思つて いる。

母の言葉に間違いなんてない。何せ自らを女手一つで育て上げた、誰よりも強くて立派な、自慢の母だから。だから今回も、前とは逆の状況ではあるけどやることは同じ。向こうが無視するなら、自分も無視するだけ。

そうすれば、いつかは終わる。

きつと前みたいに笑つて過ごすことが出来るはず。そう信じて夕闇の迫る仄暗い一本道を、少女はただ一人進む。

ぽつかり空いた両隣にほんの少し寂しさを抱きながら。

それからというものの少女は徹底的に無視無言を貫いた。流石に授業で指されても無言とはいかなが、運よくと言つてよいのか悪いのかこここのところ少女が指名されることはとんとなかつた。

そして一ヶ月がたち木々は燃えるような紅や煌めく黄金へと色鮮やかにその身を飾つたが、少女の非日常は何も変わらなかつた。相も変わらず配布物は少女まで届かないし、グープワークでもひとりばつち。偶数だから余るはずがない高をくつっていたがわざわざ三人組を作つてまで省いてきたには驚かされた。休み時間も一人なら帰り道も、帰つてからも一人。

帰つてから、に関しては母が夜勤になつてからずっとなので特に非日常というわけではないけれど、しばらく人と話さないという環境はじわじわと、しかし確実に少女の精神を蝕み削り取つていった。

なんで、私は母さんの言つとおりにしてるのに、

なんで。

ただその言葉だけが脳内に螺旋を描き巡り巡る。けれど少女は他にやり方を知らない。ただ、先を信じて無視を貫く。

それを裏切るように、木々の装いも落ちる頃事

件が起きた。視線の先にはあるのはデフォルト状態の、資料集も体操服も物理で作った偏光器も何も入ってない新学期に明け渡された時のまっさらな姿に戻つたロッカー。

「……ない」

奥の方を漁るまでもなく一目でそうと分かった。いつたい、いつの間に。

しゃがんだ姿勢のまま固まるその後ろを、クラスでも派手な方に分類される女子グループがキヤイキヤイと甲高く笑いながら通り過ぎた。

「ねえ、あそこ」

そのうちの一人。校則ギリギリまで染めた髪をクルクルといじっていた女子が、その指をついとこちらに伸ばす。

「ああ、もう片付いたんだ。早いね」

「むしろ遅い方じやないの」顔は見えない、けれど想像の中の彼女らは一様に嘲りの笑みを浮かべ、にやにやとこちらを見下していた。

ふいと見上げればもう彼女らはもういなかつた。代わりに今度は彼女らとは真逆の子。地味で目立たないけど、優しい。優しかった友達がこちらを見下ろしていた。しばらくぶりにまじまじと見たその顔に浮かぶのは何だろう。恐怖とも驚きともつかない、なんとも言い難い表情だつた。

その久しく見ていない自分に対する反応に、少女の決心が揺らいだ。もしかしたら、彼女なら答えてくれるかもしれない。

「……ねえ」

少し痛む喉をおさえて出した声は自分でも驚くほどに掠れていた。

「私さ、何かしたつけ」

俯いたまま声を詰まらせ、一歩後ずさつた彼女を逃がすまいとずいっと身を乗り出し迫る。一度出してしまえばもうそれは収めることなんてできなかつた。

「なんで、なんで、なんで私なの？ 私何もしてないよね？ 何もしてなかつたのが悪いの？ なんで、なんで、なんで」

「なんで、なんで、なんで」

一言口に出すたびに足音荒く踏み出す。私は前に、彼女は後ろに、繰り返すうちについに窓際ギリギリにまで来ていた。

「ねえ、なんでなの？」
「なんでの嵐にも負けず、彼女は口を閉ざしたまま。

「面白くない。
「ねえ、答えてよ——」

半ば叫ぶように言つた言葉を払いのけるように彼女は腕をぶんと振り払い、まっすぐにこちらを見た。

「気づいてたよずっと、ずっとそこにいたの」
「ようやく返ってきた反応に思わず唇を歪ませる。やつぱり、彼女なら応えてくれると思ってた。
「そうだよね、私たち友達だもんね。」

「そう、言おうとした。けれどそれは続く言葉に消された。

「ずっと、黙つてたから無視してたのに。なんで寄つてくるの」

真つ直ぐに見つめる目。そこには、明らかに怒りが込められていたことに、少女はようやく気付いた。

「来ないで。さっさといつてよ。キモいんだよ」
最後の方はほとんど狂つたように、泡を飛ばしながら言い放つ。そのまますり抜け走り去る彼女を追うこともできず、ただ少女は呆然と立ち尽くした。

「ねえ、あれ見た？」

「駄目だよ」

「あの子、可哀想に」

こちらを指さす子。それを奢める子。走り去る彼女を不安げに見やる子。その他大勢の視線、視線、視線。そして。

「未だ衰えず咲く真っ白な花。

それらすべてがまるで少女に「馬鹿だね」と言つているように思えて。

「いや……いや……どうして？……！」

少女は後ろで鳴り響く鐘の音も無視して、ただ

そこから逃げ出した。

無視してればいつか飽きる。そう信じてきたのに、なんで。

逃げ出した少女は真昼の燐々と照らす太陽の下をただひたすらに走った。今まで信じてきたそれがガラガラと足元から音を立てて崩れていく。

少女は他にやり方を知らない。

それ以外にどうすればいいかなど思いつきもない。ただ母の言うとおりにだけしていればいいとだけ思っていた。だつてそうすればきっと上手くいく。自慢の母さんの言うことに間違ひなんてない。

言うことをちゃんと守つていれば、きっと母さんにとっても自慢の娘になれる。

いつかにからかわれた時のように顔を歪ませ半泣きになりながら走つて、走つて、ただ走つた。その先には空っぽの家しかないと分かつていただけれど、それでも家に向かつて走つた。だつて少女にはそこ以外に帰る場所はないから。

「……あれ？」

家には誰もいはず。なのに、扉がほんの少しだけ開いていた。何故、まさか泥棒？

肝がスッと冷えた。こんな時に泥棒なんて勘弁してほしい。どうしようか、迷つた末に扉の隙間に耳を当てる。

「あ……い……けれ……よ……た」

壊れたラジカセのように一定の間隔で繰り返し繰り返しぼつぼつと呟く声。それは紛れもなく少女の母だった。どうやら今日は夜勤ではなかつたらしい。

本当はこのまま母に泣きついてしまいたい。けれどその様子に憚られ躊躇われた。

「……だいま」

小声で言つて、家に入る。

入つて、後悔した。

「あんな子、いっそ産まなければよかつた」繰り返していた言葉がはつきりと聞こえてしまつたから。

「そつか、私いらない子だつたんだ」さつきとは違つて表情は変わらない。なのにそれ以上に大粒の涙が滾々と湧き出る泉のように途

切れる」となく頬を伝っていく。

「……！」

ようやく気付いたのかこちらを見やる母に、それでも頑張ってにこやかに笑む。確か、この笑顔が好きって昔言つてたよね。

「じゃあね」

「——待つて、いかないで！」

こちらに向かつて手を伸ばす母に背を向け、来た道を飛ぶように駆けていった。

屋上つて鍵かかつてないんだ。

誰にも会うことなく思つたよりすんなりと入れたことに内心驚きながら、少女は柵へ向かつて歩を進める。今まで事故が起つていなことが不思議なほどそれは低く、足をかければ簡単に乗り越えられた。

どうせこうなるなら、最初からこうしておけばよかつたかもしれない。見下ろせば一面がアスファルトの鈍色に覆われていた。特に今立つている真下はかなりごつごつしていて、普通に転んでも肉が抉れて相当痛いだらうことは想像に難くない。

まして落ちたりした日には、死は免れないだろう。

でも、それでいい。

もう日常は戻つてこない。なら、完全に壊してしまえ。

さようなら、私の非日常。

躊躇うことなく何もない空へ踏み出した。

「危ないじゃないか！」

屋上にはたいつ間にやらくさん的人が集まつていて、そのうちの一人がふらふらと所在無さげに彷彿う少女の手をがつしりと掴んで引き戻す。

……なんてご都合主義な、小説のような展開が起きるはずもなく。

ぐらりと傾いた上体は重力に逆らうことなく真っ逆さまに地面めがけて落ちていく。地面より一足早く、血塗れた紅に染まつた空。その向こう側を目指し煌めく光の粒がぱたり、ぱたりと昇つていった。

綺麗だな。掴めるかな。

伸ばした手は落下の勢いに抗えず歪に曲がる。

「……やっぱり、届かないか」

浮遊感に飲み込まれ暗く霞ゆく意識の中、少女はぼつりと最後の零を落とした。

「ねえ、知ってる？ 隣のクラスの噂」「知ってる知ってる。例の子のでしょ。確か二ヶ月ちょっと前だつけ」

黄昏時特有の淡く妖しげな光の中、教室の隅に影三つ。話に花を咲かせ、鈴を転がしたように高く甘やかな声が練習終わりの氣だるげな空気に響く。

「二か月前……ああ、あの子のことか」

「そう、その子のこと」

「本当に可哀想だったよね」

三人が三人して顔を見合させ、頷き合う。

「だつてねえ……登校途中に居眠り運転にはねられて、なんてひどすぎるよ。当たり所悪かつたせいで、多分即死だつたって」

「当日とかみんな泣いてクラス全体既にお通夜みたいだつたつ……つてうるさい人はうるさかつたか」

「まあアレはアレで場をどうにかしたかっただけみたいだけど。あれでちょっとは気が落ち着いたつて子もいたし」

「でもまさか、その子がねえ……。」

ひそひそと内緒話染みた素振りの二人に、一人
きよとんと首を傾げる。

「その子が、どうしたのさ」

まるで獲物を見つけた猛禽類のように、おしゃ
べりな一人は目を弓型に細めにんまりと口元を吊
り上げた。

「でるんだってさ、その子の幽霊が」

「何それ。バカバカしい」

「でもさ、今日飛び出してつた子。あの子見ちゃ
つたらしいよ。ぐつちやぐちやでぐつじゅぐじゅ
の子が迫つてきて…」

「やめて、リアルに想像しちゃつたじやん」

まあぐつじゅぐじゅは嘘、けどなんてニシント
意地悪く笑う少女。ぐつちやぐちやは否定しない
んだって言葉は喉の奥に仕舞つた。もし肯定され
たらと思うと背筋を冷たいものが走る。

「それになんかその子のお母さんも見たらしいよ」

「え、それいつの話」

「今日よ今日。さつき先生が言つてた。家に帰つ
て来ただのこつちに向かつてただの大変だつたつ
て」

「でもたつた一人の愛娘亡くしたんじや、ねえ。
そんなにまでなる気持ちも分からなくないかも」
二人の噂好きはいつものこととはいえ、流石に
死人をネタにするのはいただけない。加速するお
しゃべりに加わる気にもなれず、窓辺によりかか
つた。

「でもさ、死んだなら死んだでちゃんと逝くと
逝けつて感…」

不自然に途切れた会話。不審に思い見やるとそ
ろつて目を丸くしこちらを見ていた。

「はつはーん。騙そつたつてそうはいかないよ
【違う……今……後ろ……】

先の不敵な笑みはどこへやら、今や色という色
を失つたような面差しでこちらを見つめている。
こちら、というより正確には丁度少女の真後ろの
窓の向こうを。

後ろに向き直るも何ら変わつたところはない。

「後ろつたつて何にもないじやん

言い切るか言い切らないか。
べちやり。

粘っこい音が、真下から聞こえた。

「……は
言いようのない恐怖につま先から頭にかけてぞ
わざわと、霜がかかったような感覚に襲われる。
今のは、音は。

「……ねえ

不安げに曇つたアルト。振り返ろうとして、は

たと気付く。

ここには、ソプラノしかいなはずじや？

「ねえ、ねえ、ねえ」

まるでそれしか言葉を知らないように、繰り返す。そういえば後ろの二人はどうしただろう。恐る恐る、目線をできる限り下にやって、後ろを

「ねえ、聞いてよ」

絹を裂いたような叫び声が、学校中を駆け巡った。

それからというもの、この学校には今でもこんな噂が流れている。

噴き出した血のように鮮やかな空の日には、道連れを求める手招きしながら落ちていく少女の靈が現れるらしい。

あとがき

おはこんばんちは。去年の冬からまともに入部した二年生の千里です。

ものすごく唐突ですが、私は驚きとかサプライズとかどつきりとかそういうものが大好きです。とあるゲームのとある真っ白けつけな刀にハマつて感化されたとかではなく、ハマる前から大好きですむしろ驚き大好きな姿勢に親近感覚えて気づいたら推していたくらいです。いやもちろん驚きを追う白い鳥以外の本丸の皆も大好きというか強いて言わなくていいなら箱推します。うちの初期刀は今日もこじらせ可愛い。去年の今頃はまさか現物見に行くほどハマるとは思わなかつた。

……脱線しましたが、ぎゅっとまとめると私は

驚きが好きです。なので、作品も最後に驚きをもつてくるような仕様にしています。というか気づいたらそうなっています。毎回毎回起承転結の転がやたら遅くにやってきて、そのまま結にしけむ感じですね。

今回のお話もそんな感じになつています。

【（）から先話の内容のネタバレあり】

死に気づいてない幽靈にとつて自分を無視する周りの人はどう見えるんだろう、というのが今回の話の元になつた発想です。

置いてある白い花、無視してくる同級生たち。なんかこれいじめに近くないかな、と思つたら勝手に指がタイピングを始めてました。

ただこのネタ自体を思いついたのはずいぶん前のことでは実はこれ高校時代に書いた作品のリメイクであります。けどその時はだいぶ展開も結構でもあります。高校時代の方では少女をつなぎとめたかった親友が少女を誤魔化し執着させて飼い殺すメリバ。今回は誰にも受け入れられず普通にバッドエンド。

どうあがいても鬱々しきまつしぐらでした本当にありがとうございました。ただ書いてる途中は勝手に何度も主人公がポジティブシンキングし始めていたので、今度またこのネタで書くときはちゃんとハッピーエンドになるかもしれません。まあ主人公もう死んじやつてるんでどうにもなりま

せんが。

あとそうですね、書いてて自分でもわかりづらいなと思ったところがありまして。序盤の方のプリント一枚持つてた子なんですが、あれは単に先生が少女がいないのを忘れて、というか普段の調子でプリントを配っちゃって余つただけです。あとつまんねえってのは前のバカ騒ぎが終わつたことに対しても、最初はまともに説明書いてたのですが諸々の都合でその描写削つちやつたのとここで補足しておきます。

さてそろそろ紙面も残りわずかとなりましたので、ここからあとがきという名の駄弁りを終わらせていただきます。

つと、最後に一つだけ。

ぐちやぐちやのという表現どおり事故当時のR¹⁸G状態か、はたまたそれも嘘で普通にきれいな状態か。

少女の姿は果たしてどちらだったのか。それは読者の皆様のご想像にお任せします。

それでは、次の機会までさようなら。

ロータス

きもだめし

「お、おいらん！ ま、待つてたよー！」

「ごめんごめん、遅れちやつてーーつてうわつ！」

私が校門に近づくや否や、茜の質量で進んでいた方向とは逆に突き飛ばされた。どんだけ力あるのよ。

「いたた……」

「ごつ、ごめんおいらん！ でもわ、私……、

怖くて……」

「大丈夫よ。私が遅れたのが悪かったし……」

か細く震える声は恐怖に打ち克ち、やつとのことで出されていることが即座にわかつてしまい私は何かしら罵倒の類いを茜に浴びることなんてできなかつた。

「ま、それはいいからさ、どいてくれる？ 私が

動けない……」

「あああわわわああわわどきますじきます、ごめんね私が重いから……」

「違う違う、単に私が非力つてだけよ」

今にも消えてしまいそうな雰囲気が、一瞬にして楽しく混乱となる。私の弁明を聞き、その混乱もすぐに安心したように落ち着き、身体をどかしてくれた。

この陸奥茜という女の子は中学生の頃からの付き合いだけれど、いつ見ても面白くて飽きることがない。目に見える感情がころころと変わるのである。よくもまあ、そんなにいそいそと頭を切り替えられるなあと私は感心している。

「？」

見つめていると、きよとんとして首を傾げた。仕草がとにかく可愛らしい。結婚したい。結婚しよう。

「どうしたの、おいらん？ 行かないの？ 私としてはそっちの方が嬉しいというかありがたいというか、なんだけど……」

と言われ、私は我に返つた。そうだそうだ、茜の可愛さに思わず忘れていた。

「あつ、うん。行くよ。行く行く」

そう——こんな夜中の学校に来たのは、伊達や酔狂ではなく、『肝試し』をするためだ。いや、肝

試しは伊達や酔狂ではないのかと言わればそれは微妙なところではあるのだけれど……。

とにかく今夜、私こと出海葵は、親友・陸奥茜とともに『七不思議』を求めて私たちが通う高校に繰り出したのである。

腕時計を確認すると、針は九時二十五分くらいを指し示していた。



この学校には、いわゆる『七不思議』があるらしい。

『七不思議』の噂は一学期の期末試験も終わり、夏休みに入る前からにわかに立ち始めた。

それは、夜中にひとりでに鳴るグランドピアノであったり、上りと下りで段数が変わる階段であったり、自律して動く理科室の人体模型であったり、図書室にあるという読むと呪われる本であったり、目が光るベートーヴェンの肖像画であったり、映った像が好き勝手に動く鏡であったり、開かずの扉であつたり。

これがうちの学校の『七不思議』だった。あたりな、どこにでもあるような怪奇談ではあるが、なんだかんだで七つなかつたり七つより多かつたりする七不思議業界においては、律儀にちゃんと七つ揃っているところはポイントが高いと評判だ。七不思議業界なんて初めて聞いた。

どこからともなく現れたこの『七不思議』はその突拍子のなさゆえに妙にリアルで、多くの生徒の下校の足を早めたわけだが、しかいまの私にとっては非常に利用しやすいものであつた。

今夜私が茜を連れて夜の学校に来ているのは、この『七不思議』の真贋を確かめるためである。当然の疑問として、なぜそんなことをするのか、と思うだろう。それはなにも私たちがオカルト研に所属しているだとか、七不思議の被害で死傷者が出ていて生徒会である私たちが若い正義感で調査を行なつていてとか、そういうことではない。そもそも私も茜もオカルト研や生徒会にはなんら関連のない一般生徒だし、死傷者なんて出でない。

なんでこんなことをしているのかと言えば、そ

れは――

「ひやつ！　おいやや、おいやん！　い、いま、
人体模型、ほんとに動かなかつた！　ぴくつて！
ぴくぴくつて！」

「あ、ごめんごめん、見てなかつた――」

「ねえええ、おいやん頼むよお。私ほんとこわ
いの無理なんだつてば、言つたでしょ！」

茜が半泣きで私の右腕に抱きついてくる。ああ。
かわいいなあ。すっかり怯えた顔もかわいいんだ
から。

賢明なる人ならばお気づきだろうが、こんな時
間にこんな場所に来ている理由はこれである。す
なわち、茜の反応を鑑賞するため、だ。七不思議
の真贋を確かめるだというのは建前でしかない。

茜は怖がりだが、「一人じや心細いの！」と言う

私の弁明――それは七不思議探しの動機を含まな
いにも関わらず――を聞いて、良い子な彼女は私
のためについてきてくれたのだ。「友達だから」。

彼女ならそう言うのだろう。可愛すぎる。
「ちよつと！　聞いてるの？」

見れば茜は頬を膨らませてむくれ顔。怒った顔

も愛らしい。

うんうん聞いているよと頷いて見せたら膨らん
だ頬はしほんでもちもちほつへに戻つてくれる。
「あー、そうそう。人体模型、だつたわね……」

正直、七不思議に興味はない。だつて茜の挙動
言動が見られればそれでいいんだもの。

『七不思議』は今夜の肝試しの肝。知らぬ存ぜ
ぬでは通せない。しかし私自身、科学の熱心な、
とはいかないまでも、そこそこの信徒なのだ。怪
異の実在を信じてはいるわけではない。

さて、いま私達がどこにいるのかというと、理
科室だつた。理科室特有の黒い耐火テーブルの列
の奥――そこには人体模型がある。これが動くとい
うのが『七不思議』の一つだ。

「で、動いたつて？　ほんと？」

「おそいよつ！　言つてるでしょ、私は見たの！
ぴくぴく――つて！」

ぴくぴく――つて、それはどこがどういう動きを
表しているのだろう。茜が「ぴくぴく」という
音を発して謎のジェスチャーを披露しているのが
可愛いのでいいのだが。

「なにその信じてなさそな顔は……。もー！ちやんと見ててよね！」

怒らせてしまつたかな。少なくとも、先ほどまでの怯えの感情は今の感情に塗りつぶされてしまつた。

茜が指さす方——つまり人体模型を見てみる。

光源が非常灯くらいしかない暗い室内で月明かりに照らされ、その顔の立体が生々しく陰影で描写されている。月光による光沢。ロマンチストならば神秘的、オカルティストならば不気味だとか言うのだろうか、私にはただ物理的な存在でしかない。

しかし茜がそうではないことは知つてゐる。彼女はロマンチストやオカルティストの側面を持つ普通の人間である。だからこそ肝試しが効果を發揮する。

「……近づいてみる？」

「えつ、ええつ！ あーつ、うーん……。えつと、うん、まあ、そうだよね。『七不思議』がほんとかウソか確かめるためだものね……。近づこうか……」

〔〕

とても嫌そなである。可愛い。恐れを抱きながらもほんのちょっとの勇敢さを含む表情、たまりません。

私を盾のようにしながら、茜が後ろから私の右腕をぐいぐいと押してくる。その力には抗わず、ただその茜らしい筋力を堪能していた。

人体模型が近づく。

近づいてみれば、片方の、『内側』を晒している方の目玉が私達を凝視していた。少し左右に動いてみても、模型の目線は追つてきた。おそらく錯覚の類いだろう。ペーパークラフトのアートでそういうトリックを見たことがある。

人体模型が、手を伸ばせば触れる距離にまで近づいた。

しかし、人体模型が『びくびく』どころか微塵も動く気配はない。

「動いてないじやないの？」

「えー、だつてさつきは動いてたように見えたんだけどー……」

おかしいなあ、と茜は言う。

そもそも、『動く』人体模型というのが曖昧すぎ

るのだ。手足が自由自在になるのか、それとも理科室を徘徊するのか——何をもって『動く』と言われているのか。

「やつぱり、にわかん噂なんてウソに決まってるよね——ただでさえ、七不思議なんて胡散臭いの

に」

「でも、本当だつたら大変だよ？ 学校の平和は私達が守らなきや！」

いつの間にか謎の正義感に燃える茜だつた。萌える。しかし、『七不思議』が本当だつたとして、

一体何が大変なのだろう？ そして、私達にできることはあまりないと思うのだけれど。

悶々と思考を捏ねながら茜を鑑賞していると、またむくれ顔が目前に映つた。

「ねえ！ ちゃんと見ててつてば！ なんかいいえばわかるのー！」

しまつたしまつた。また無意識に茜を見つめてしまつっていた。いや、それが目的だから良いのだけれど、当の茜の機嫌を損ねるわけにはいかない。

人体模型を見てみる。何度見ても人体模型である。さきほどまで顔の方しか見ていなかつたため

に今気づいたのは、それが筋肉の模型ではなく内臓の模型だということだ。肺や胃、腸や腎臓などの臓器が赤黒く輝いている。こちらも顔と同様に月光による陰影の効果が出ているようだ。

「うーん、動かないねえ？」

茜の首を傾げる動作が、腕の感触で伝わつてくる。きつと、下唇を前にせり出した『拗ね』の表情をしていることだろう。飽き始めているのでは。「……次、行こうか？ これ以上いても仕方なくない？」

「えー！ でもさつきは確かに動いてたように見えたんだけど……」

私の提案はお気に召さなかつたようで、茜は未だにかの人体模型に『執心』である。仕方ない、私も人体模型を見つめ直そつ——と、したそのとき。

——よう見えた。

「うつひやあああああああつ！ やつぱり動いた

よ！ 助けておいやん！」

甲高い悲鳴が上がり、私の腕を抱き締める力が
いつそう強まる。茜の柔らかい感触が心地よい。
というか、さっきまでの学校を救おうと言つてい
た勇ましさはどこへ行つたのか。

「……はあ。そういう」とね……。大丈夫よ、親
愛なる我が友」

「く、くう～ん」

わざと大仰な風にセリフを言いながら、茜の頭
を撫でる。パニックに陥つていた表情はみるみる
うちに駆けられた飼い犬のそれになつた。従順。
安堵。そういつたものに。

「……でもおいやん。おいやんも見たよね？
びくびく、つて動いたように見えたよ——内臓が」
「そうね。びくびく、つて動いたつて言つてたの
は、内臓のことだつたのね……」

茜の真意をようやく理解できて良かつた。茜が
よくわからないことを言うのはいつものことなの
だが、まあもう少しあわかるようになつて言つて
欲しいと思わなくもない。

とにかく、幽霊の正体見たり枯れ尾花——とい

うことでいい。

「確かに動いたわね——内臓の部分の陰が」
内臓 자체が動いたわけではない。内臓の立体を
演出する陰が動いたことで、『内臓が動いた』よう
に見えただけなのである。おそらく微小な飛行生
物、例えば小鳥や羽虫なんかが月光を横切つて遮
り、陰に変化を与えた結果、そのように見えたの
だろう。

そのことを茜に説明すると、目を輝かせた。

「おおお！ なるほどなるほどね？ さつすが科
学部部長！」

恐怖を克服した茜。私の腕は解放された。胸の
感触を味わえないのは残念だが、また機会はある
だろう。抱きつかれっぱなしでも疲れるし。

「じや、次行こうか？」

「うん。行こう！」

そういうわけで、私たちは理科室をあとにした。

去るとき背中に視線を感じたのは、きっと氣の
せいだ。



ガラガラリと。

続いて来ましたるは音楽室。扉を開ければそこは廊下よりも静謐さを感じる空間であった。そう感じるのは、昼間ならば常に賑やかに何らかの音で満ちている音楽室に対するギャップからだろうか。

「うわっ、こわ！ いつも思うんだけど、なんで音楽家の人が怖い顔してるのかしら？」

「そんなの、自分の威厳に宿をつけるためとかそんなところでしょ。豪勢な髪だってカツラだつていう話だし」

「へえー！ 見栄張りなのねえ！ そしておいちゃんはほんと物知りよねえ！」

「ふつう、写真撮られるときはカツコつけるものでしょ？ それに、自撮りで盛るのなんて今のご時世じやみーんなやつてるじゃないの」

「あー、確かに！ 言われてみれば、私もめつちやめつちや盛つても盛らなくとも、茜が

可愛いという事実には何の影響もないが、どちらにしても異なる可愛さを提供してくれる。ちなみに盛った茜の自撮り画像は送られてきた瞬間に保存した。

「あれ？ おいちやん、誰の目が光るんだつけ？」
「ベートーヴェンのはずよ」

「ほんと？」

「嘘言つてどうするのよ」

「えー、いや、ベートーヴェン、いないんだけど？」
「えつ——そんなはずは……」

音楽室にあると噂される怪異は二つ——目の光るベートーヴェンと、ひとりでに鳴るピアノだ。しかし肖像画群を眺めても——モーツアルト、バッハ、ハイドン、ヘンデル、シューベルト、ショパン、ワーグナー、瀧廉太郎——と、なるほど確かに、ベートーヴェンの姿はなかつた。

噂の真贋云々どころか、その存在すら無いとは……。そもそも、なぜベートーヴェンだけ目が光るのか、よくわからない。

無いものは確かめようがない。そういうことで、私たちはもう一つの怪異、ピアノの方に向かつた。

いたつてふつうのグランドピアノのよう見え
る。ピアノカバーを捲れば、月明かりから照らさ
れた黒光りが目に眩しい。

「…………」

「…………なにも起きないね…………」

「そうね…………」

幽霊の類いにはあまり詳しくないので想像なの
だが、ピアノがひとりでに鳴る場合、少なくとも
鍵盤蓋は開け放たれるのではないだろうか？ 鍵
盤蓋が閉じられたままピアノの音が聞こえるのは
それは確かに不気味ではあるけれど、光景を思い
浮かべると滑稽だ。まあ、『人がいないはずの教室』
から音が聞こえるのが怖いのだから光景を思い浮
かべる者などまずいないのだろう。

断片的な『存在』が私たちを恐怖させる。中途
半端な、不確定で不安定な『存在』が私たちを恐
怖させる。これは神や妖怪、怪異妖魔魑魅魍魎の
起源である。理由・原因・動機の不可解・未知。
これが恐怖を生む。

「ああ、もう！ なにも起きない！」

「ちょっとどいて、と茜が私をピアノの側から押

し退け、椅子に座る。そして鍵盤蓋を開け——つ
てちょっととちょっと？

「ちょ、なにしてんの？」

「なに、つてそんなのピアノを弾くに決まつて
かい。

「なに、つてそんなのピアノを弾くに決まつて
じやん」

「何が決まつて——」

何が決まつているもんか、と言いかけて思い出
した。茜はピアノを弾くのが大好きなのだと。

「いやー、うずうずしてたんだよねー！ そりや
本当にひとりでに鳴り出したら怖かつたけどさ、
なんにも起こらないんだもん！ いつかい夜の真
つ暗闇の教室で楽器弾いてみたかったの！ なん
だろ、楽器の音が一層際立つて思わない？」

などと言いながら、手慣れた様子で準備を進め、
鍵盤に手を当たた。ポロロン……、と綺麗な音が
部屋に広がる。滑らかな動きだ。十指がまるでそ
れぞれ意思を持つていて、それでいて統制が為さ
れている、そんなような。私と同じ人間の手とは
とても思えない。いや、違う人間の手なのだった。

心地良い旋律が一分ほど流れたら、茜は席を

立ち、一礼した。ぱちぱちぱち、と拍手をする私。

そうせざるを得なかつた。

「はあ～。すつきりしたつ！」

「凄いわね本当……。いまの、なんて曲？」

「えー？ いや即興だから曲名とかないよ～？」

「は……即興……？」

「うんうん。どう？ 我ながら良い出来だと思つ

んだよね」

「いや、良いも何も……」

私をして無意識に拍手せしめるとは、さぞや名のある名曲なのだろう。そんな風に思つていたのだ。

「え？ 何も？」

「最高だつたよ」

私の賞賛を聞き、茜はにわかに顔を赤らめる。

「あははっ……。そつか、よかつた……」

手足を恥ずかしそうにもじもじさせてうつむく茜。可愛らしさまで最高になつていた。

「そ、それはそれとして！ 結局音楽室はなんに

もなかつたね」

「理科室も似たようなもんだけどね」

演奏に感動していく気づかなかつたが、先ほどまでの状況、事情を知らない第三者から見たらまさに『人のいないはずの部屋からピアノの音が鳴り響く』というものだつたのではないだらうか？ ……触れないでおこう……。ひよつとしたら、私たちのよな闖入者の物好きが、ただ夜の音楽室で独奏を演じていただけなのかもしね。火のないところに煙は立たないもの。

茜のまた違う一面が見られたので良しとしよう。

「さあ、じゃあ、次行こうか——」

と茜の手を引いたのだが、茜は動かなかつた。

「お、おいやん……」

「ど、どうしたの？ まだ弾き足りない？」

「いや、そうじやなくて、ベートーヴェン……」

「ベートーヴェン？」

急いで茜の視線の先を追う。

追つた先には、ベートーヴェンの肖像画が——

目を光らせて、存在していた。

そういえば、と今更ながらに思い出す。

音楽室の内装は音楽科担当教員に一任されている。その教員は、大のベートーヴェン好きなのだ——狂信とも言えるほどに。ならば、あの肖像画の列にベートーヴェンがいなかつたのは頷ける。

ベートーヴェンの肖像画は特別に待遇され、壁際ほどほどにあるピアノの真上に設置されていたのだ。

ベートーヴェンのみに噂が立つたのは当然とも言えた。

茜をちらりと見遣る。固まつて身動きができるないようだ。それにしてもかわいいと再認識する。そしてもう一度輝く目を見るとどこか違和感を覚えた。そこで私は茜から手を離し、ベートーヴェンの肖像画の真下に近づこうと試みる。ベートーヴェンの輝く目を真下から見上げたとき、その正体は容易く分かつた。

「ははん……なんだ、そういうことか」
ピアノの向こう側にいる茜にサムズアップして「大丈夫よ！」と告げる。ピアノ越しの茜の顔は

涙に濡れているように見えた。可愛いなあ。茜を安心させるためにも早くしなければ。

私は、壁を叩いた。力の強さはさほど問題ではなく、衝撃が肖像画——『目』に辿り着けばそれでよかつた。

すると、肖像画からカナブンほどの甲虫が飛び立つていった。ベートーヴェンの光る目は、その位置に留まる甲虫の背中が月光を反射してできたものだったのだ。

……なんというか、当然と言えば当然だけど、しようもないものばかりだ。

居所を失つた甲虫は、月光の最中、薄暗い空中を飛び回り——最終的に、茜の頭にとまつた。瞬間。

「——つううわあああああっ！ やだーっ！ 取つて！ 取つて！」

茜が大声で喚き立てる。ただ動いているのは口だけで、他の部分は微動だにしていない。涙目。なにも大丈夫ではなかつた。

茜は大の虫嫌いだつたのだ。

危険なんじやないかな……」

「ううー……。お嫁にいけないよお……」
すっかり傷心の茜。移り気な気分屋でも、かのダメージは絶大だったようだ。私が虫に触れることをなんとも思わない人間だったから良かつたが、そうではなかつたらと思つとぞつとする。患部をよしよし撫でてやる。私の腕の中にいる茜はあるで泣き疲れた赤ん坊だった。

「大丈夫。なにがあつても私が茜をお嫁に貰うから」

「ほんと? 約束だよ?」
「もちろん」

この程度の冗談が交わせるなら、ある程度は回復しだらうか。無論、私はこれが日本にいる以上冗談でしかなくなつてしまふのが腹立たしくはあるがそれはまた別の話だ。茜のコンディイションが心配だ。

「ねえ、今日はもうここんなのやめて帰る? もしかしたら、万が一にも、『本物』が現れるかもしれないし、お化け相手に精神的に疲弊してゐる状態は

柄にもなく非科学的なことを言つてのける。非

科学的な噂を利用して茜をおびき出しているのだから、その雰囲気に合わせるのは当たり前に必要なことだが、普段考えないようなことをすらすらと言えてしまうのもなんだか身体がこそばゆい。「いや……、大丈夫……。それより、七不思議が本当だつたら学校が大変だし……」

「……まあ、そうね」

全くそうではないが、本人が大丈夫という以上拒みようがない。しかし私たち二人は少し変な部分を除けばなんの変哲もない人間だ。靈媒の技能も能力もない。七不思議が本当だつたら、真っ先に危険なのは私たちなのだけれど、茜はそこらへんを認識しているのだろうか。

◆

本当であるはずも、ないのだが。

結局のところ。

上りと下りで段数が変わらる階段は、何度上り下

りして段数を数えても不動の十二段であった。開かずの扉は、開かない以上何もすることができなかつた。呪われた本は、どれがそれなのかという情報を持たずに図書室に特攻を仕掛けたために探し出すのを諦めてしまった。

そんなわけで、最後の不思議である。

今までの不思議は有り体に言えば不発弾のようなものだつたため、茜は最後こそは意氣込んでいた。最初の恐怖はどこへやら。

そうしてやつて来ました、一階の女子トイレ。

この女子トイレに併の『鏡』がある。

「うわ、さすがに暗いね……」

時計を見ると、一時を回っていた。もう四時間

弱は校内にいることになる。

トイレというものは、入り口からでは中を見通せないようになつていて構造上、細長い形をしていることが多い。外からの光が——月明かりが差し込みにくいのだ。入り口付近であるからまだ多少は明るいが、中に入つてしまえば視界を保てるかどうかは怪しい。

「光源が必要かもね」

「おっ、じゃあ私がケータイのライトで照らすよ！」

茜はそう言い、スカートのポケットから携帯電話を取り出して背面のライトをつける。

「……というかそれ、最初から使えれば良かつたんじゃ？」

「あはは、忘れてたよね」

「怖がつてた割に、肝が座つてるのね本当」

「いやいや、怖がつて冷静な判断に欠けてたから忘れてたんだよ！」

「ま……、なんでもいいわ。行きましょうか」

「ふー、信じてないでしょおいちやん！」

私は茜の手を引き、茜は私の腕を抱き締める。この柔らかさは何度味わつても心地良い。眼前の景色は茜のスマホが照らしてくれる。今までの暗さに目が慣れていたので多少眩しすぎるところはあるが良いナビゲートだ。

だがそれも束の間。内部に侵入してすぐ、眩い光が私たちを出迎えた。反射光だ。

私達が、私達を出迎えた。

私達は、私達に瓜二つで、私達と寸分違わず同

じ举动をしていた。

「これだよね……」

「うん、一階職員室すぐ横の女子トイレの洗面台。いまここにあるこの鏡が、『その鏡』ね」

今のところ、鏡に異常なところは見受けられない。私が口を動かせば、鏡の中の私も同じように口を動かす。鏡の中の茜も、依然として鏡の中の私の左腕に巻き付いていた。怪異と思われる物から目を離さずに茜を見られるというのは素晴らしい。もう少し辺りが明るければ文句はないのだが。「鏡ね……」言いながら、茜がすいすいと洗面台の方へと近づく。「これ、鏡だって分からなかつたら相当怖いよね」

「どういう意味？」

「いやだつてさ。いま目の前に見える私たちが『鏡の世界の私たち』だつて、私たちは理解しているから怖くもなんともないけど、そうじやなかつたらドッペルゲンガーニやないの。瓜二つの容姿の人間が同じタイミングで同じことを言つて同じことをしてゐるんだよ？ これ自体怖いよねえ」

なるほど——と、思う。『鏡の世界』はあくまで

私たちの世界の裏返し。そう理解しているからこそ、『鏡の世界が裏返しではない状況』や『裏返しの世界が鏡の世界ではない状況』はなるほど確かに、恐怖の対象だ。

今までこそ科学が発達し、『鏡の世界』は電磁波——特に可視光——の物理的反射によって生まれる虚像の産物だとわかっている。しかしそれまでは不可解で神秘的な呪具として扱われたことも多い。古代などでは呪術や魔術に引っ張りだこであつたらしい。影見——それが鏡の語源だ。『鏡の世界』はこの世の影。いつの時代も神秘主義の対象としてされてきた。現代でさえも。

要するに、予想に反した現象が起ると怖い。そういうことなのだろう。

「でも、不思議よね」

「何が？」

「私が右手を上げたら、鏡の中の私は左手を上げる。これってすつごく不思議じやない？ 鏡の中では常に私たちは違う行動が為される、とも考えられるんじやないかしら」

「ああ……。その話なら、ちゃんとした説明を用

意できるわ」

「本当!! 聞かせて聞かせて！」

振り向いた茜の目は、鏡越しで見た疑念を抱いた物とは変わって爛々と輝いていた。可愛い。

「そうね、鏡の中では右が左になる——そう思う?」

「うん」

「でも実はそうじやないのよ」

「えー? どういうこと?」

「例えば、鏡の前で寝つ転がるのを想像してみて——あ、いや、いま寝つ転がらないでよ: 汚いんだから」

「わかつてゐるよ!」

「そしたら、鏡の中のあなたは頭と足を逆にして寝つ転がつてゐるかしら?」

「ううん、そんなことない。むしろそんなことが起つたらまさしく不思議な鏡だわ!」
「そうよね——つまり、鏡が反転させているのは左右ではないの。鏡が反転させているのは——反転させている軸は、あくまで鏡の面に垂直な軸。だから私たちの前に鏡があつたとき、反転してい

るのは左右ではなくて、前後なのよ」

「確かに——確かに! なんだか当たり前すぎて見逃してたけど、私が鏡の中の私を見るとき、鏡の中の私は私を見てる!」

「そう、前後が反転しているから、そうなるのよね」

「でも、じやあなんで左右が反転してるって感じるんだろう?」

「それにも理由があるわ。なぜならば、私たちは左右対称な生き物だからよ。上下は頭がある方、重力がある方で定義される。前後は顔がある方、背中がある方で定義される。でも左右っていうのは、私たち人間が左右の区別を持たないために、上下・前後に對して『こちら側が右』『あちら側が左』という風に決めた——だからこそ、上下前後のどちらかが反転すると左右が反転したように錯覚するのね」

「ほお、なるほどね! 寝つ転がつたら『上下が左右になる』から、反対に寝たりしないつてことか!」

科学好きの血が騒いで長々と話してしまつたが、

茜は納得した様子で鏡に向き直った。鏡越しの茜の表情は笑顔だ。満面の笑顔。スナップを切りたいくらいだ。

鏡の中の茜は再び、懐中電灯を持った左手を大きく掲げている。つまり茜は懐中電灯を持った右手を挙げていて——ってあれ？

——懐中電灯？

ゾクリ。と。

背筋に悪寒が走った。

よく見てみなければ。大事なことだ。

こちらの茜は、確かに、確かに、右手のスマホをライト代わりにしている——のに、鏡の中の茜が左手に持っているのは——懐中電灯なのだ。

些細な違いあれど、些細な違いなればこそ。理解できずに。怖い。

私は気づくと、茜の左腕を掴んで走り出していく。

一刻も早く、ここから逃げなければ。その思いに取り憑かれていた。

「ねえ！ ちょっとおいちやん！ 急にどうしたの？」

茜の声も意に介せない。茜はまだ気づいていない。ならばまだ運が良かった。

純粹無垢たる茜を怪異の食指に晒さずに済んだだけでも僥倖というものだつた。

どれくらい、走つただろうか。まだ走つてている。とつくに校門を抜け、茜の腕をしつかりと掴みながら街中を疾走している。

いやしかし——ようやく回復してきた意識が認識する。この景色は、この街並みは——どうやら私は、茜の家に向かっているらしい。無意識のうちではあるが、茜を安全などここまで送り届けたかったのだろう……。

朦朧とする意識の中で思う。私は一度と、一階の女子トイレは使用しない。茜にも利用させない。危険だ。トイレは他の階にもたくさんあるのだ。なんの問題もない。

「大丈夫——大丈夫だ。

「おい——ちゃん、ねえ、はあ、はあ、疲れたよ、
もう走らなくても、よくない？」

随分遠くから茜の声が聞こえる。すぐそばにいるはずなのに。

なんだかぼんやりとしている。

「いてつ」

そんな声が聞こえたかと思うと、右腕に感じて
いた重みが消えた。

それでもそのまま少しだけ走り続けた後、私は
ハシと意識を鋭くした。

重みが消えた。私が右手に掴んでいるはずのも
の——掴んでいるはずの誰かがない。

茜、茜がきつと、転んだのだ。
茜——！

「——『茜』つ！」

後ろから、いや、上の方から人の声が聞こえた。
茜。茜の声だ。

振り向くとそこは、茜の家だった。茜は一階の
窓から顔を覗かせてこちらに手を振っている。

そうか——と私は胸を撫で下ろした。

そう名前を呼んで振り返った。
振り返ったのだが。
その視界の先には、ただ懐中電灯が——あの『鏡

の中の『懐中電灯が転がっているだけだつた。

「え……、え？」

混乱。混乱していた。端的に言つて私は混乱して
いた。今までずっとそばにいたはずの茜が消え
てしまつていて。どこか見えない場所に隠れてい
るわけでもなさそうだ。視界にはずっと屏が続
いていて、その高さは茜が容易に越せるようなもの
ではないとわかる。

街灯がパチパチと明滅している。心臓がドクド
クと早鐘を打つていて。

二つがシンクロしているように思えて私は——

「あれ、おいちゃん！　どうしたの？」

たらそうと早く言つてくれればいいのに。

はあはあ、と、まだ息が落ち着かない。

私のただならぬ様子を察したのか、茜は「そつち行くからちよつと待つてて！」と言つて顔を引つ込めたかと思うと、戸から出でてくれた。天

使か。

「茜——茜！」

「はいはい。おいややんのアイドル茜ちゃんですよー。なにどうしたの？ そんな鬼みたいな顔し

て。怖いよ？」

そう言つてクスクス笑う茜。

ああ良かつた、茜は健在だ。

「どうかごめんね」

突然謝り出す茜。ああ、黙つて先に家に帰つていたことを謝つているのかな？ 別にそんなこと気にしなくていいのに。現にこうして会いに戻つてきてくれたのだから。

「え？」

「え？」

「今日、学校には来なかつた？」

「え、うん。そだよ。夏休みなんだし、用事がなきや行かないよ。誘つてもらつたのにブツチしちゃつて申し訳ないんだけど、緊急事態だつたら。メッセージ、送つたでしょ？」

私は急いで携帯電話を取り出し、確認する。ドタキヤンを告げるメッセージが自分の記録に残つていた。送信時刻は九時二十二分。

「ちょ、ちよつと待つてよ……、じやあさつきまでいたのは……」

から、逃げ回つてただけなんだけど……。そんなわけで、今日の学校散策ドタキヤンしちやつたの。せつかく誘つてくれたのに「ごめんね！」ほんと、今度なんか奢るから！」

頭の中が混沌に犯されている。

混乱、混沌、混沌。

どうしようもなくグルーミーな。

……いま思い返して——ハツとなる。

今夜ともに夜の学校を探検し、その苦楽を体験

した那人。

あんな会話やこんなやり取り。愛らしいその肢体、仕種、言動は、彼女のものではなかったのだ。

そんなはずがあるわけもない。

なぜならば、私の今夜の記憶の中にある彼女に
顔なんてなくて。

闇より深い深淵に塗り潰されたような黒い孔が、
ぽつかりと空いているだけだったのだから。

タナカ

た。

「あんた、もしかして、歌姫だろ？」
アガサは黙つている。

「髪の色を見れば分かるさ」

房、いつのまにか零れていた。アガサが、慌てて
髪をしまう。

「大丈夫。取つて食うつもりはないさ」

商人が、口を開けて笑う。

「どうだろう？ 一曲、歌つて聞かせてくれよ。
歌姫の歌は、それは素晴らしいものだつて言うじ
やないか」

アガサは、首を横に振つた。

「いいじやないか。減るものでもないだろう？」

アガサは、首を振る。

「歌姫の歌を、一度でいいから聴いてみたいんだ。
なあ、頼むよ。少しでいいんだ」

「……」

「金か？」

「……」

「何だよ。さつきから黙り込んで」

ふと、商人風の男が、アガサの前で足を止めた。
アガサを見て、すこし戸惑い、それから声をかけ

アッサリアは在つた。
アッサリアの往来の片隅、角の崩れた岩を腰掛
代わりにして、アガサは座つていた。少し高台に
有るここからは、谷底の道が良く見えた。

谷底の道といつても、馬車が数十台、横並びに
進める幅が有る。道の両脇では、商店が軒を連ね
ていた。その色の多彩さは、ここが砂漠の真中で
あることを忘れさせる。

アガサを見て、すこし戸惑い、それから声をかけ

「……」

「じゃあ、一言でいい。一言、こんにちは、って
さ。挨拶だろ？」

それでもアガサは、俯いたままだつた。
「俺らみたいな、薄汚れた商人には、声だつて聴
かせるのも惜しいのか？ 金持ちの前だつたら、
いくらでも口を開くんだろ？」

商人は忌々しそうに言つた。そして、足を前に
突き出す。靴の裏が、アガサの座る岩を、叩いた。
「……」

商人はそのまま去つて行つた。アガサは彼の背
中を目で追いながら、頭巾を被り直す。
やがて、商人は人ごみに紛れ、見えなくなつた。
髪は、もうはみ出していいない。

「アガサ。お待たせー」

今度は、少年がやつて來た。両方の手に、パン
を待つてゐる。その片方を、アガサに差し出す。

「なんか有つたの？」

アガサは首を横に振る。

「そう。なら良いけど。……早く食べなよ。温か
い方が美味しいから」

少年がパンに噛り付く。白くずつしりとしたパンを食い破ると、中から甘辛く煮た肉と野菜が溢れ出す。

「これ、美味しいよなあ。大回廊の外でも、売ればいいのにね」
この大きなパン、一度に肉も野菜も摂れる。そして、歩きながらでも、馬車の上でも、食べることができた。時間に追われる行商人だらけのこの回廊で、大いに流行つていた。

アガサが、少年の足を蹴る。半分ほどに減つたパンを少年に突き出す。

「お腹いっぱい？ もう。しようがないなあ。ボクが食べるよ」

少年は、パンを受け取ると、もう半分も樂々、胃袋に収めた。

アガサが少年を蹴る。
「今度は何さ？」

蹴り、蹴り。

「……ん、何？ もしかして、飽きたの？」
アガサが頷く。もしかしなくとも、飽きていた。
「でも、これ美味しいのに。…………分かつた。

晩ご飯は別のにするから、蹴るのを止めよう

ルルグ一回廊に足を踏み入れたその日、少年はこのパンに出会った。それ以来、少年はこのパンの虜だった。お昼ごはんを買ひに行かせれば、迷うことなく、この具入りの白パンを買ってくる。疲れていたけど私も一緒に行けば良かつた、とアガサは思う。

アガサは少年の方を向いて、手をチャカチャカと動かす。

(これから どうする ?)

アガサの手の位置、指や肘の曲がり具合、その全てに意味が有つた。少年には、それで伝わる。「まだ行つてない鍛冶屋もあるよね」

(回る ?)

「うん。回る。……ボクだつて嫌だよ」

二人は、頭上を見上げる。谷には、幾つも、岩できた橋が架けられていた。段違い、筋違いに架けられた橋は、まるで蜘蛛の巣のようである。

いや。蜘蛛の巣は平面だが、アツサリアの橋は立体的なので、より複雑だった。そして、それらの橋にも、太さに応じて、住居や商店、工房が詰

まっている。

「この辺、もともとは洞窟だつたらしいよ」

アガサは無言で先を促す。

「あの橋は、架けられたんじやなくて、削り残しこんだつてね。人が通りやすいように、百年かけて洞窟を削つたらしいんだけど、ああいう橋みたいにして、天上の部分を少し残したんだつて」

(どうして ?)

「土地が足りないから。後は、日よけのためかな。狭い谷底で、工夫してよ」

(私たち は 疲れる)

「風情が有るじやん。疲れるなら、おんぶしようか？」

アガサは首を振る。

「なんで？」

(恥ずかしい)

「へえー」

少年が、にやりと笑う。

「アガサにも恥ずかしいとか有るんだ。へえー。

意外だなー。気にしないで良いのに」

アガサの、こういう反応は、少年にとつて新鮮

だつた。旅を始めてから、初めてかも知れない。
「ん？ その指の形、なんて意味だつけ
目潰し。」

「ぎょえええええ！」

少年が目を抑えながらのたうち回る。

「……こ、このボクに目つぶしを当てるとは、や
るじやないか。歌姫、辞めちやええば？ 暗殺者と
かどう？ ボク、教えるけど？」

アガサが、少年の膝の裏を蹴る。早く行こう、
という意味だ。容赦が無い。

「アガサ。こっち、こっち」

一人で勝手に歩き出したアガサを、少年が正し
い方向に導く。

向かう先にも、橋が有る。少年たちは、まだ橋
の上は回つていなかつた。

「それにして、凄い人だね」

（ 砂漠の 中じや ない みたい ）

「ほんと、ほんと」

人ごみもそうだが、その種類も多様だつた。肌
の黒い者、黄色い者、白い者。格好も商人風に交
じつて、武器を背負つた者や、巡査のような者と、

様々である。行き交う人の流れには、実にたくさ
んの人種が入り乱れている。

少年はふと、こんな事を思う。この人ごみの中
で、自分たちはどう見えるのだろうか、と。

アガサは、砂と同じ色の外套を着込んで、頭巾
まで被つてゐる。身体の線を隠しても、華奢な事
が簡単に分かる。

一方、少年はこの辺の住人たちと変わらない格
好をしていた。白っぽい生地で、身体を締め付け
ない服だ。おへそが出てゐる。一応、腰と背中に
短剣を括つてあつた。

巡査中のお嬢様と、護衛というのが妥当だらう
か。

「あとは、恋人とか？」

アガサと少年の間の距離が、若干、遠くなる。
「ごめん、ごめん。そんな警戒した目で見ないで
よ」

やがて、アガサたちは、工房が立ち並ぶ橋に辿
り着いた。下を見ると、先ほどの大通りが、橋と
橋の隙間から見えた。

「さてと。それじゃ、この辺りから始めますかね」

アガサが頷く。頷いて、一步下がる。アガサに

とつて、人と接するの何かと面倒なのだ。

「ごめんください」

少年が工房の前で声を張る。すると、おそらく見習いであろう小僧さんが出てきた。

「あいよ！ 何をお求めで？」

「この工房で、刃物は扱っていますかね？」

「金物なら、なんでもござります！ どんな刃物

で？」

「こんな短剣なんですけど」

少年が、懐から取り出す。小さな、手の平に収

まる、短剣だ。

「これは、打ち合はんじやなく、投げるためのも

んですねえ」

見習い職人は、そう言つて、鞘から短剣を抜く。

刃の輝きは、一分の隙も無い。

「綺麗だ……」

見習いの目線が、刃に吸い付けられていた。意

識までも、刃の中に吸い込まれそうな勢いだ。そ

ろそろと、見習いの指先が動く。彼は、刃を撫で

ようとしていた。自分の意志とは関係ない。剣の

魔力がそうさせるのだ。

「そこまで！」

少年が、見習い職人の手から、短剣を奪い去る。

見習いが、手の中を見る。そこに短剣は無かつた。

「お願ひだ！ も、もう少し！ もう少し、見せてくれよ」

「はいはい。ちよつと待つてねー」

少年は、柄の尻を摘み、見習いの目の高さまで、短剣を持ち上げた。

「綺麗だ……」

「ほい」

ぱつ、と少年が指を離す。短剣は、刃を下に向かってままで落ちて行く。やがて、切つ先が地面に触れた。そこで短剣は止まらない。地面に、するすると沈んでいくのだ。まるで抵抗など感じさせない。

そして、握りの部分まで地面に埋まると、ようやく短剣は止まった。

「え？ え？」

小僧さんが、地面をへたへたと触る。短剣は、

沼にでも沈むかのよう、地面に突き刺さった。

しかし、何度も触つてみても、地面は砂漠の乾いた岩だ。

少年が短剣を引き抜く。地面には、ちょうど刃の形の穴が開いていた。短剣の刺さった跡である。

「こんな短剣、造れますか？」

「む、無理だ！ 無理に決まっている！ こんなのが、有りえない！」

「銀貨五百枚、払います。もちろん、この辺で流通しているやつで」

「どれだけ大金積まれたつて、こんなのは造れないよ」

見習いの騒ぎ声に、奥から親方も出てきた。彼の反応も、似たようなものだった。アガサと少年は、お礼を言つて、立ち去つた。

（飽きた）

（ボクも）

アガサと少年は、もう何度も、このやり取りを繰り返していた。短剣を見せて、驚かれる。その大きさに驚きつぶりに、いい加減、食傷気味だったのだ。

（帰つていい？）

「どこにさ？ だいたい、歌姫様が居ないと、どうしようも無いじやん」

（知つてる訊いただけ）

少年とアガサは、その後、似たようなやり取り

を、數十回、繰り返すのだった。

（飽きた 飽きた 飽きた）

（もう半分だから）

（まだ半分なの…）

アツサリアは、交易の街であると同時に、鍛冶の街なのだ。質の良い鉱石や石炭が出る事、そして、周りが砂漠なので、毒水や鉱石屑の処分に困らない。おかげで、大小様々な工房がひしめき合つていた。

その時だ。悲鳴のようなものが聞こえた。市場の喧騒とは、明らかに違う。

（なに？）

「分からぬ。……ねえ、アガサ。心なしか、君が嬉しそうに見えるんだけど？」

（そんなことない）

嘘だつた。このお姫様は、刺激を求めてらつし

やる。

(あっち)
「いや、行かないって。変なことに巻き込まれたら嫌だし」

(魔法が 関係ある かも)

「いや、まあ……そうかも」

無いとも言い切れないで、少年は困る。

「関係無かつたから、引き返すからね？」
アガサが頷いた。騒ぎ声のした方へ、少年は、アガサの手を引く。

(……この辺だな)

(何も 無い)

「下だね」

見れば、斜め下の橋で、砂糖に群がるアリのようだ。人が群っていた。高さが有るので、本当にアリのように見える。

「……乱闘みたいだね」

少年は眼を細めながら呟いた。

(止めて)

「え、あれを？」

アガサが頷く。

「あれは魔法、関係無いでしょ。ただのケンカみたいだし」

(ごめん 正直に 言う)
「うん？」

(飽きたの 鍛冶屋を 回る のに も 岩と砂 しか ない 風景 に も)

「ボクは、君の道化師じやないんだけどね……」しかし、実際、少年も退屈していた。アガサの言葉には共感できた。というより、少年の本心そのものだ。

「でもなあ……」

「くくく、とアガサが頷く。

「どうしたの？」

(たぶん 太丈夫)

「大丈夫つて、何が？」

アガサが、チヤカチヤカと手を動かす。

「その手の形、なんて意味だっけ？」

押した。

「え？」

よろよろと、少年が後退る。

「……あれ？ 浮いてる？ 浮いてるの？」

嘘で

た。一步踏み出すと、そこは、もう地面では無かつた。

騙されたなあ……」

少年の身体が、傾いていく。もう、止まらない。そんな少年を、アガサはじつと見ていた。二人の目が合う。アガサは、「あー、落ちてるなあ」という無感動な表情をしていた。

少しば驚いてよ……」

この横暴な、しかし予想外なアガサの振る舞いを、楽しんでいる自分もいることに、少年は気づく。

く。少年自身も、それが不思議だつた。
「でも、流石に、今回は少し怒らないと」

そんな事を呟きながら、少年は落ちて行つた。
埃っぽい、砂の交じつた空気が、身体にぶつかる。

網の目のように張り巡らされた橋が、上に流れていく。

身体を捻る。着地。まずは、つま先から。このまま勢いに任せると、足が潰れるので、少年は身体を横に倒す。膝、腰、わき腹、と地面につけながら、真横に転がる。下向きの勢いを、横向きに

変えるのだ。後は転がつて、勢いを殺す。

ふう、と少年は息を吐いた。

このくらいで死んでいたら、歌姫の守り手は務まらない。アガサも、それを分かつていてやつて

16

少年は身を起す。すると、目の前に、靴の裏
迫つて、身體を念る。

が逝っていた。慌てて身体を揺る。少年は忘れていた。彼の落下点は、乱闘の真っ

答へに思ひいた 徒の薄い吾國の眞の
ただ中だつた。怒り狂う群衆が、柔み合ひ、押し

合、蹴りと拳が乱れ飛ぶ。

少年は喧嘩の嵐の中を、頭を抱えて逃げた。や

じ馬が人垣を作つてゐる。仕方ないので、彼らの

股下を潜る。非常に屈辱的だった。

「……おまたせ。今回のは、ちょっと酷いよね？」

少年は歩いて元いた橋に戻った。

「あれ? あ、いや、ごめんなさい。人靠いで」と

た

アガサだと思って声をかけてみたら、別人だったのだ。頭巾を着込み、似た背格好だったので、間違えてしまつた。

別れたのは、確かにこの辺だったはずだ。しかし、アガサが居ない。

「守り手様！」

背後から声がした。振り向いてみれば、屈強な男が、少年に向かつて手を振つてゐる。腰に佩いた剣から、アッサリア騎士団の者だと判断する。

そして、その屈強な男の陰に、アガサが居た。

アガサが指をチヤカチヤカと動かす。おかげり、と言いたかったのだろう。しかし、指の動きは不完全だった。何故なら、氷砂糖を持つていたから。

手の平からはみ出るほど巨大な砂糖の塊だ。様々な果物も、砂糖と一緒に固めたらしい。氷砂糖の中に、色鮮やかな果物が浮いてゐる。逸品である。「そんな高価なもの、どこで？」

隣の騎士を指さす。

「申し訳ございません。お腹をお空かせていらしたようなので、私が差し上げました」

「ボクの活躍は？」

アガサは首を横に振つた。氷砂糖の中から、キイチゴをほじくりだして、指で弾く。少年は、飛んできたキイチゴを、口で受け止めた。キイチゴ

は甘くて美味しかつた。

「騎士さん。こんな高価なものやらないで良いですよ。どうせ味、分からないです。甘ければ何でも良いんですよ」

アガサが少年の脛を蹴る。

「分かったよ、アガサ。……いい加減、ボクも疲れた。今日はそろそろ、お終いにしようか」

アガサの顔がパアッと輝く。

2

アッサリアの街の、東側の入り口に、その塔は立つてゐた。アッサリア騎士団東駐屯所である。

砂漠の夕焼けは赤い。塔の先端だけ、朱色に塗つたようだつた。

「よろしければ、当駐屯所を、宿にお使いください」

街角で出会つた騎士は、そう申し出た。タダらしいので、少年は厚意に甘えることにした。

少年たちは、塔の最上階へ通された。そこでは禿頭の大男が、騎士たちに、何やら命令を飛ばし

て いる。その極太の一の腕は、茶褐色の肌と相まつて、丸太のようだつた。アガサの胴体と同じくらいの太さだ。

「すみません」

物々しい雰囲気も気にせず、少年が大男の話を遮る。一瞬、辺りが静まり返つた。慌てて、案内の騎士が、禿頭の大男に、耳打ちした。大男が、すぐさま最敬礼の姿勢をとる。遅れて、周りの騎士も、それに倣う。

「お待ちしておりました。歌姫様。守り手殿。遠路はるばる、お疲れ様です」

「今、伝えたことだけを、やつておいてくれ。後は副団長に任せる。以上！」

端騎士たちは、足並みそろえて部屋を出でていった。少年とアガサ、そして大男が部屋に残された。

「慌ただしくて、申し訳ございません。私、このアツサリア騎士団を預かります、ギヨーム＝アデイブルと申します。以後、お見知りおきを」「歌姫のアガサと、その守り手の者です。話の腰を折つてしまい、すみませんでしたね」

「問題ございません。アツサリアには、しばらくご滞在なさるのですか？」

「ええ」

「その間は、どうぞ我が駐屯所をお使いください。幸い、将校用の部屋に、空きがございます」

「助かります」

数分後、ふかふかの寝台に飛び込む、アガサの姿が有つた。

（一生 寝台 から 出ない）

体を寝台に沈み込ませたまま、腕だけ上げてアガサが言う。

「分かつたよ。明日は、残りの鍛冶屋さんと、市場を巡るからよろしくね」

枕が飛んでくる。少年は、それを捕まえながら言う。

「あ、これ、めちゃくちや柔らかいな」備え付けの卓には、瑠璃の水差しと、果物が盛られた籠が置かれていた。景観も良い。砂漠の街が、赤い夕焼けに沈んでいる。市場は、まだまだ活気があつた。これから、夕餉時だつた。

「タダで泊まるのが申し訳ないよね」

少年が寝台をのぞき込むと、アガサが幸せそうな顔をして、転がっていた。象牙色の髪が乱れて、風に吹かれた後のように、白いシーツに広がっている。

「アガサ。明日、団長さんに会つたら、お礼言つてよ」

（私 嘶れ ない から 無理 無理）
足をばたつかせながら、アガサが言う。

「都合良いな。頭ぐらい、下げなつて……」

（覚えて いたら）
指の動きが、投げやりだつた。少年は最近、指の動きかたで、アガサの機嫌が分かるようになつていた。

「あと、アガサ。騎士さんと二人でいたじやん？ ああいうの、ダメだよ」

（お菓子 もらつた から ？）
「お菓子は別に良いんだけどさ。アガサが嘶れな い事、バレちゃうでしょ？」

（ごめん）

「怒つては無いけどさ。気を付けないと……」
アガサは歌姫だが、魔法が使えない。声が出せ

ないから。つまり、彼女は、普通の少女と変わらない。気づけば、すーすーと寝息が聞こえて来る。アガサが眠りに落ちていた。

少年はしばらく、その音に聞き入つていて。胸が、微妙に、規則的に上下している。アガサの寝姿は、彫像のようく美しい。このまま、王宮の宝物庫に、安置できそうなほどだ（寝相が若干、前衛的すぎるが）。

最も目を引くのは、髪だ。その象牙色の髪は、本当に象牙を引き絞つたように、滑らかで、艶やかだ。

少年は思わず、その一房を摘まむ。

はつ、とする。

アガサの髪は、ガラスのような肌触りだつた。少年は、ヨクボウに抗うことができなかつた。摘要の毛先を、鼻先に近づける。その時、アガサと目が合つた。

（何をしているの？）

その夜、アガサの寝台の四隅に、アツサリア騎士が立つことになつた。

当然、少年は部屋を追い出された。真っ赤な手形の残る頬を撫でる。ヒリヒリと痛んだ。

「守り手殿。何かお飲み物はいかがでしよう?」

「いえいえ。お気になさらずに」

少年はギョームの執務室に居た。来客用の革張り椅子に座る。その背後、部屋の隅で、ギョームが控えている。半ば、給仕のような態度の団長だが、腰には真剣を佩いていた。彼の背後の壁にも、抜き身の槍が掛けある。装飾兼、実務用だ。合理的である。

アガサが、団長に向けて手紙を認めたのだ。曰く、「この不埒ものを見張れ。命に代えても見張れ。

不審な動きをしたら、殺しても構わない」

そういう訳で少年は、団長と一緒にすることになったのである。

歌姫からの手紙という事で、ギョームは大いに恐れ、憚っていた。アガサは喋れないで、手紙を託したにすぎない。しかし、手紙という格式ばつた様式が、団長にさらなる緊張を与えた。

しかも、内容が、内容である。守り手を殺せとは、如何に。団長は歌姫の命令を断るわけにもい

かないので、こうして少年と二人でいる。いざ事が起こればどうすれば良いのか。彼は戦線恐々としていた。

このまま一晩は辛いな、と少年の方から話しかける。

「やつぱり、飲み物をもらつても良いですか?」

「かしこまりました。コーヒーなどござりますが?」

「コーヒー?」

「南方のお茶です。貴人などが、好まれるので、守り手殿もお好きかと」

「……では、それを願いします」

少年自身、貴人のつもりは無いのだが、厚意は受けておく。運ばれてきたお茶は、香ばしい、良い香りがした。しかし、椀をのぞき込んだ少年の表情が、一瞬曇った。椀の中身が、ドス黒い。

少年は、試しにほんの少しだけ、口に含んでみる。

「不味い!」

と叫びそうになつた。それでも堪えたのは、これ以上、空気を悪くしないためだ。苦みを我慢し

て、飲み下す。喉に苦みが絡みついたような気がする。

貴人の舌がバカなのか、自分がバカなのか。

「ギヨームさんも一緒にいかがですか？」

「そういうわけには」

「一人で飲んでも、味気無いんですよね」

「そういう事でしたら」

ギヨームが、少年の体面に座る。騎士は、何でもないよう、コーヒーを飲む。あの苦い液体が美味しいのだろうか。少年は疑問に思う。もし少年に気を遣つて、不味いのを堪えているのであれば、余りにも不毛だ。

「ところで、ギヨームさん」

「ギヨームとお呼びください」

「いえいえ。ギヨームさん。アガサの手紙なんですが、無視してもらって良いですよ。実はですね、ボクが間違つて、アガサの身体を触つてしまつたんですよ。それで腹を立ててみたいで」

「髪の匂いを嗅いだ、とは言わない。

「大げさなんですよ。あいつ。姫様とか呼ばれる人種はワガママというか、なんというか……。

とにかく、余り気にせずに。適当にあしらつてもらつて結構ですよ。せつかく、一晩、一緒に過ごすんですから、仲良くしましょうよ」

少年は笑いながら言つた。すると、ギヨームが、

恐る恐る口を開いた。

「……質問をしても良いでしょうか？」

「何なりと」

「アツサリアにいらしたのは、やはり、魔法絡みでしようか？」

さて、なんと答えたものか。少年は取り敢えずコーヒーを啜る。

「魔法——」

少し、間を置く。

「——と言えば、魔法ですかね？」

ギヨームの顔に緊張の色が浮かんでいた。分かれやすくて良いなあ、と少年は思う。この辺はやはり、兵隊さんらしい。

「まあ、アツサリアは、通り道ですよ」

「ではどこへ？」

「それは答えられません」

「失礼、つかまつった」

「いえ」

少年は嘘をついた。少年とアガサは、この街に魔法を探しに来たのだ。

「ボクからも質問です。この街で、歌姫の事を知っているのは何人ですか？つまり、歌姫が魔法を使えると知っている者は、何人ですか？」

「私を含め、四人です」

「四人……」

歌姫とその守り手は、魔法を求めて世界中を巡る。彼女たちが自由に旅をできるのは、その土地の有力者が後ろ盾となり、便宜を図ってくれるからだ。しかし、その事を知っているのは、ごく一部のものだけだ。王やそれに近い者、有力都市の市長、そしてギヨームのように軍隊の長、などである。一般人は、歌姫を旅の芸人か何かだと思つてゐる。

アッサリアも有力都市であるが、この規模にして、四人は多い。

「多いですね」

「ご存知の通り、アッサリアは議会制を採用しておられますゆえ」

「と、言いますと」

「商人、鍛治師、探鉱者、騎士、それぞれの代表が話し合つてこの街の事を決めるのです。それぞれの長が、歌姫様の事を知つております」

「なるほど……。しかし、代表が複数いると、勝手をしだす連中が出るのでは？」

「それには及びません。例えば、騎士が横暴な振舞いをすると、鍛治師たちが武器の供給を止めます。鍛治師が勝手にふるまつた時は、商人や探鉱者が原料の供給を止めます。そして、商人や探鉱者が暴れだした場合には、騎士が、彼等を守ることを止めます」

「お互に、牽制し合つていると」

「そうです」

ギヨームがコーヒーを飲み干す。

「アッサリアは砂漠の街です。何か問題が起つた時、逃げ場は有りません。街の皆は、運命を共にしています。ですから、街の有り方は、話し合つて決めるのです。代表も、もちろん投票で選ばれます」

「多くの街を見ましたが、先進的な仕組みですね」

「ありがとうございます。ルグルー大回廊という特殊な環境のおかげでしよう」

その後、しばらく、少年とギヨームは、互いの持つ情報を交換した。少年は、周辺の国や街の情勢、ギヨームはアツサリアの現状や歴史について語った。

翌日、朝早くから、少年とアガサは街を巡つていた。

「アガサ。機嫌、直してよ」

（どうしようも ない バカ）

「悪かつたつて」

（いつも 同じ こと して いた ？）

「違うよ。昨日が初めてだつて」

（ 本当 ？）

「本当だよ！……本当つてことにしどきなよ。

そつちの方が、心の健康的にも良くない？」

アガサの蹴りが飛ぶ。

（ 最低！ ゴミ！ ゴミ！ 魔法も 見つから

ない ）

「魔法はボクのせいじゃないって」

少年とアガサは、神懸つた切れ味を持つ短剣に

ついて、あちこち尋ねて回つた。しかし、結局、見つからなかつた。

谷の壁面すぐ近く、ヤシの木陰で、二人は昼食をとることにした。丁度、細長い岩を、腰掛けの代わりにする。近くを、人口の小川が流れていた。少年が、小川に水筒を沈め、水を汲む。手首から先が、別世界のように冷たい。水は太陽を反射して、きらきらと光つていて。

（どうするの？）

「どうしますかね……」

アガサたちは既に、全ての鍛冶屋を回つていた。

しかし、短剣の出どころは分からなかつた。

（ 考えてよ 人の 髪の 句い 噙いで いな

いで ）

一瞬の衝動に流されるほど、自分の理性は弱か

つたのか。少年は後悔する。

「街を歩きながら、色々考えたんだ」

（ 例えは？）

「はつきり言つて、今回の件は不自然なんだ」

（どうして？）

「あんな名刀が出回つてているんだよ。普通だつた

ら、もつと噂になるはずだけど、誰も知らないんだよ？」

アガサが頷く。

アガサと少年は、ルグルー回廊の十四の宿場町を経て、アツサリアに辿り着いた。その間に出会った魔法の剣は、一本のみ。現在、少年の懐にあるそれだけだ。

その短剣は、アツサリアのすぐ近くの、盗賊が持っていた。それ以外、どの街の市場でも、魔法の剣など、皆、知らない様だった。実際、この短剣を持っていた盗賊も、その価値に気が付いていなかつた。盗品の山に埋もれていた。

(どうして 誰も 知らないの ？)

「たぶん、隠してる奴がいる。権力者だと思うけど

(何で ？)

「偉い人は、歌姫の事も、魔法の事も、知ってるでしょ？」

剣は斬るために有る。名刀が有れば、気に食わない人物を斬り殺すなり、貴族に高値で売りつけるなり、有効活用するのが普通だ。しかし、それ

をしないのは、それが魔法であると知っているから。そして、魔法ならば歌姫に回収されてしまう事を知っているからだ。そんな事を知っているのは、一部の権力者のみだ。

「……ちなみに、アツサリアには、偉い人が四人いる」

(多く ない ？)

「多いね……」

だから少年は困っていた。そして、この四人という数字も絶対ではない。もともと知っていた人物が、自分の周りに漏らしているかも知れないのだ。あくまで、最低で四人、という事だ。

(意外)

「何が？」

(しつかり 考えてた)

(どう？ 少しは見直した)

「見直してもヘンタイなのね……」

(それでさ この後はどうするの ？)

「そりやあ、地道に探すしかないね。商人にも、当たつてみようか」

(ヘンタイ ヘンタイ ヘンタイ)
やはり、アガサはその案をお気に召さなかつたらしい。その日は、まだ日が暮れないうちに、引き揚げた。

(晩ご飯 まで 寝てる)
ヤシのジュースを枕元に置いて、アガサは寝台に寝転がる。今日も、騎士団の駐屯所にお世話になることになった。

「じゃあ、ボクも、ちょっと出かけてくる」

(どこ 行くの ？)

「短剣のお手入れ。刃こぼれしてるんだ」

(いってらっしゃい)

少年の答えに、アガサは興味を失つたらしい。

「一人で出歩かないでね。夜は危ないから」

アガサは寝転がつたまま膝を曲げ、片足だけ持ち上げた。分かつた、という事だろう。

駐屯所を出たところで、少年は風よけを羽織つた。少年が向かったのは、鍛冶屋ではなかつた。幾筋も掛けられた橋を、上へ、上へ、と登る。やがて谷を抜けて、砂漠に出た。

〔暑いな……〕

谷底には、すでに夕日は差していなかつたが、地上では太陽が、水平線に差し掛かっているところだつた。消えかけの陽光だが、ギラギラと肌を刺す。

ふいに、風が吹いた。羽織つた風よけの隙間から、細かい砂が入り込む。肌が、ザラザラする。谷底に居ると、忘れそうになるが、やつぱりここは砂漠なのだ。

しかし、そんな砂漠で、怒声を上げながら動き回る集団が有つた。アッサリア騎士団である。

少年は目を凝らし、号令をかけているギョームを見つけた。

「どうも。こんばんは」

「これは守り手殿」

一旦休憩、とギョームは声を張り上げる。

「訓練ですか？」

「ええ」

「これで、騎士団全員ですか？」

「ほぼ全員ですね。うちには零細騎士団ですから」

「やはり、砂漠だからですか？」

「はい」

せいぜい、三百程度か。多くの騎士を常駐させ
る場所も、食料も、アツサリアには無かつた。

しかし、騎士たちの動きは、遠目に見ても良か
つた、と少年は思う。そして、統率もとれていた。

頭数こそ少ないものの、弱くはない。並の騎士団
が相手なら、倍の人数とも、難なく渡り合うだろ
う。ルグルー大回廊、大砂漠という地の利を生か
せば、それ以上の相手とも戦えるはずだ。

「どうですか？ ボクと手合させしませんか？」

「そんな、恐れ多い」

「宿を借りておられるのです。この土地では、他流
の武術を目にすることはないですよね？」まあ、
ボクのは、何流なんだか、自分でも良く分かりま
せんが」

「そういう事でしたら、ぜひとも」

ギヨームは、騎士団の中から、三人を選び出
た。その全員が若手なのは、経験を積ませるため
だった。

「しかし、本当にまとめて三人？」

「ええ。このくらいで、良い勝負になるはずです」
「流石は、守り手殿だ。存分に学ばせて頂きます」

「お手柔らかに」

ギヨームが再び、声を張り上げる。

「注目！ こちらは、私の客人にして、剣の名手
である！ これより、その技を我々に披露して下
さる！ 盗むつもりで観よ！」

薄暮の砂漠で、立ち合いが始まった。

少年は、訓練用の木剣を借り受けた。指先から
肘までと同じくらいの刃渡りの剣だ。少年が普段
使っている短剣と、だいたい同じだ。おもりが入
つっているので、持った感触も真剣に近い。

対する、若手騎士三人は、皆、長剣を構えてい
る。肉厚で、彼らの身長ほども有るような、大剣
である。もちろん、おもり入りだ。おまけに騎士
は、風よけの外套の下に、鎖を編んだ鎧を着込ん
でいる。ここは砂漠だ。足首まで砂に埋もれる。
そんな状態で、この大剣をいかに扱うのか、少年
は興味深くもあった。

「ギヨームさん。いつでも良いですよ」

「承知した。……それでは、始めッ！」

少年は、剣を少し下げ気味に、身体の前で構え
る。

騎士のうち二人が、少年の正面から間合いを詰める。もう一人の騎士が、少し下がって、少年の右側に回り込もうとしている。正面の二人が少年の注意を引き、後ろの一人が強襲する、という算段だろう。

多対一の戦いは、味方にも気を配らなければならない。騎士たちは、良く訓練されているようだつた。

正面の騎士の片方が、大剣を振り下ろす。少年は横に逃げる。剣風が肩を撫でた。思つたよりも、近い所を、剣が通り過ぎた。砂に足を捕られたのだ。

続けざま、もう片方の騎士が、剣を振り下ろす。

少年が、握った剣を横なぎに振り抜く。大剣の側面を叩いて軌道を逸らそうとするが、威力が足らない。砂のせいで踏ん張りが利かない。

少年は、転がつて逃げる、が逃げた先にも大剣が降り下ろされる。

(動きにいい)

正面の二人の騎士は、交互に斬撃を繰り出す。そうすることで、巨大な剣の、隙を補つてているの

だ。そして、もう一人が、死角から少年の隙を狙つていた。不意を突く一撃に、少年は何度も、ひやりとした。

砂のせいで、身軽には動けない。これでは、軽い武器と重い武器の、機動力の差は小さくなる。むしろ、身軽など気にせず、一か所に留まつて、大剣を振り回す戦法は効果的だ。大剣の一撃は重い。

(砂漠の剣か。なるほどね)

足元への突きを、少年は前に跳んで躰す。勢いそのままに、突きを繰り出す。騎士は大剣の幅を盾のように使い、突きをいなす。

別の騎士が、大剣を横なぎに振るう。追撃を諦めて、少年は後ろに下がる。
おまけに、砂漠には障害物が無い。騎士たちは大剣を思うままに振るえる。

いい加減、息が上がってきた。足にまとわり付く砂と、時折吹く強い風が、体力を奪うのだ。しかし、眼前の騎士たちは、まるで呼吸を乱さない。鎧を着込み、大剣を振り回しているのにも関わらず、からくり人形のように、剣を振るい続ける。

(長引くと、不利かな)

少年が仕掛ける。

彼は目前の騎士に突きを放つ、が、全身の筋肉を引き絞り、急制動をかける。騎士達は眼を見張つた。疾風のように踏み込む少年が、瞬間、石像のようには止めたのだ。

しかし、騎士たちは止まれない。一人は大剣で突きを防ごうとして、もう一人は、少年に、反撃の突きを放とうとしていた。大剣の慣性に引きずられて、そのまま動き続ける。

そんな騎士たちを尻目に、少年は硬直した姿勢から、弾けるように、横なぎを繰り出した。突きから、払いへ、一瞬の変化。騎士たちは、少年の動きを、目で追うしか、できなかつた。

影切り。

凹の動きで、敵をかく乱する。

短剣の切つ先が、一人の、騎士の顎下を撫でた。

ここでようやく、騎士たちが反撃に転じる。だが、背後から迫つてくる突きも、少年は読んでいた。攻撃している時が、最も隙ができる。その隙を、騎士が逃さない事を、少年は読んでいた

だ。

少年は跳んだ。そのまま、突き出された大剣の上に乗る。間髪入れず、大剣を、思い切り踏み抜いた。少年はさらに、高く飛びぶ。

宙がえり。騎士の頭上を超えて、背後に回り込む。逆さまの世界。頭から、落下しながら、身体を捻る。騎士の後頭部を、短剣で撫でる。

着地。前転することで、勢いを殺す。そこで、少年の眼前に、大剣が突き付けられていた。

結果、少年の負けであつた。とはい、三対一で戦い、そのうちの二人を仕留めたのだ。取り巻く騎士たちからは、盛大な拍手が送られる。ありがとうございました、と三人の騎士たちが少年に握手を求める。

「いや、こちらこそ」

少年は、そのごつごつとした、赤銅色の手を握り返す。

「素晴らしい試合でした。しかし、私達には、高

度すぎたかも知れません」

そう言つて、ギョームが苦笑いする。

「それは申し訳なかつたですね」

「いえいえ。私達の、未熟さのせいですから」「ところで、この後も、訓練を見学していつても良いですか？」

「はい。もちろんですとも」

その後、少年は練兵を見学した。練兵は、暗くなつてからも続いた。むしろ、日没からが本番だつた。僅かな手灯りを頼りに、騎士たちは剣を振るつた。

アッサリア騎士団は、総勢、三百人程度だつた。少年はその一人、一人の動きを、じつくりと観察した。

「だからさ、お風呂は、訓練に参加した人だけしか入れないんだって」

アッサリア騎士団の練兵は、夜遅くまで続いた。死肉を漁る灰色犬の遠吠えが、砂漠に響くななか、騎士達は剣を振り続けた。昼と一転して、砂漠の夜は冷える。水が凍るほどだ。

訓練の後、汚れと疲労を洗い流し、冷えた身体を温めるため、騎士達は風呂に入ることを許される。練兵に同席した少年も、一緒に風呂に入らなければ、誘われたのである。もちろん、断る理由は無かつた。

（今日は私も訓練に 出る）
「……死ぬから。だいたい、今日は訓練お休みだ

し

（ ずるい ずるい ずるい ）

蹴り、蹴り、蹴り。

「悪かつたつて」

まさか砂漠で、風呂に浸かれるとは思つていなかつたが、本当に気持ちよかつた。自分だけ、良い思いをして、申し訳なくは思う。

（ ヘンタイ から 良い においが する ）

因は、少年だけが風呂に入つたことだ。
アガサが、少年の脛を蹴る。彼女の立腹の原因は、少年だけが風呂に入つたことだ。
（ ヘンタイ から 良い においが する ）

と少年を問い合わせた。

けじやないんだよ？ 訓練に付き合つたんだ。
色々、教えてあげたりしたんだ。剣技とか、体捌きとか」

アガサが、少年の手を掴む。そして、手のひらを自分の顔に近づけて、まじまじと見るので。
(その技は 私を 守る ための もの？)

「まあ……そうだね」

(それを 売り物に した 風呂に 入る ため)

視点を変えれば、そういう見方も、できなくはない。

「でもさ、その言い方は、ちょっと……」

アガサが、ハツとした顔をする。

「どうしたの？」

(ヘンタイ だから ？ 私の 髪の 句いお風呂で 落ちない よう ？)

「濡れ衣だよ！」

アツサリアに来てから、この調子だよなあ、と少年は思う。

ともかく、風呂の恨みはすさまじかった。アツ

サリアの街を回る間も、一日中、少年は嫌みを言われた。もう一つ悪いことに、今日も、魔法の剣に関して、ほとんど収穫も無かつた。

ギヨーム以外の、三人の魔法を知る者を尋ねた。それぞれ、鍛治師、商人、探鉱者の組合代表である。しかし、皆、魔法の剣については、何も知らない。ただ、商人組合と鍛治師組合は、それとなく魔法の剣について探りをいれる、と約束してくれた。これが成果と言えば、言えなくもない。

「今日もお疲れ様」

(おつかれ)

アガサが寝台に倒れ込んで、そのまま沈み込む。バタバタと足を動かして靴を脱いだ。我が家か、というくらい騎士団の来賓宿舎に馴染んでいた。少年も、革張り椅子に身体を預ける。水差しに用意された、花の香りのする水を、椀に注ぐ。

(このまま ここに 住む ？)

寝台からはみ出した、アガサの腕がそんな事を主張する。

「それも、良いかもねえ……」

その時だ。部屋の扉が叩かれる。こういう時の対応は、もちろん少年の役目だ。

「はい。どうぞ」

少年が扉を開ける。すると、ギヨームが控えていた。恭しく、胸に手を当て一礼する。

「ギヨームさんじやないですか。こんにちは。あ、そろそろ、こんばんは、ですかね」

「お休みの所。失礼いたします」

「いえいえ。どうかしました?」

「こちらの不手際で、アガサ様に迷惑をおかけしましたかと……」

少年は一瞬、振り向く。アガサは、寝台の上で、トラの敷物のように寝転がっている。アガサの敷物だ。

「……そんな事は、無いですよ」

「いえ。お風呂を用意の忘れておりました」

お手紙を頂きました、とギヨームが言う。彼女ならば、やりかねない。

少年が、ちらりとアガサを見る。寝転がつたままだが、僅かに筋肉が強張っているのを、少年は見逃さなかつた。聞き耳を立てている。

「僭越ながら、アガサ様のお風呂を用意させて頂きました」

「……いや、本当、すみません。ご迷惑おかけして」

「こちらこそ、申し訳ございません。それで、お詫びと言つては、大したことではないのですが――」

用向きを伝えると、やがて、ギヨームは帰つていった。

少年は、ギヨームの提案を吟味する。思ったより早かつたな、と心の中で呟く。

「ねえ、アガサ。起きてる?」

うつ伏せのアガサに、少年が尋ねる。アガサが、頷く、というよりは、寝台により深く顔を埋める。明日なんだけど、ギヨームさんが、お風呂を用意してくれるつて

アガサが飛び起きる。

(本当 ?)

アガサが、口までパクパクさせているのを、少年は見た。

「本当だよ」

アガサの顔が、ぱあっと輝く。

(ギヨームさん 良い人)

「本当にね……」

(守り手 交代?)

「いや、それは流石に勘弁……。それと、ギヨームさんが、訓練を見に来ないか、って。余興の代わりだとか」

(訓練 面白い?)

なかなか難しい質問だ。確かに、暴力を見世物として楽しむ人は、居る。しかし、アガサは、そいつた見世物を好まない。もちろん、毛嫌いしているという程でもないのだが。

ただ、アガサに訓練を見に行つてもらう方が、少年にとっては都合が良い。

「楽しいと思うよ。昔だけどさ、走つたり、槍を投げたり、木に登つたりの競争を見物したじやん?」

アガサが頷く。

(大きい お祭り だった)

「あんな感じだと思うよ。二つに分かれて、模擬戦とかしてくれるらしいし」

(行く)

アガサは行く気になつてくれたらしい。

「そうか。良かったよ」

「何をしているの?」とでも言いたそうな眼付きで、アガサが少年を睨む。少年は、アガサの両手を握っていた。少年は、アガサの視線に気づいていたが、その手を放さなかつた。

彼女は、声を出せないから、手の形で意思を伝える。アガサからしてみれば、それは口を塞がれているに等しい。

「いや、何となく……。ごめん」

少年が、握つた手を放す。

(いきなりは 止めて?)

「うん」

(何か あつた?)

「いや。無いよ」

「たぶん、有るのはこれからだよ」と、少年は言わない。

「それより、『飯行』うよ。たまには外で食べる?」

(それも 良い かも)

二人は連れ立つて、市場へと出かけた。日が沈

んでも、街の喧騒は消えない。

3

灼熱の太陽のせいで気づきにくいが、砂漠の空気は、おそらく澄んでいる。空気に、まるで水分が無いからだ。

夜明け間際は、その透明さが際立つ。そして、昼になれば、日光が世界を白く染め上げる。だが、それも、いつまでもは続かない。やがて夕暮れが訪れ、また長い夜が来る。

砂漠の片隅に、天幕が張られていた。その中、背もたれと、ひじ掛けのついた豪奢な椅子にアガサが座っていた。

ここまで運ぶの、大変だつただろうな、と少年は思つてしまふ。

(座る ?)

アガサが尋ねる。少年は首を振る。

「ボクはここでいいよ」

少年は、アガサの椅子の横に立つていた。
(お菓子 取つて)

「はいよ」

天幕に置かれた卓には、砂糖菓子が積まれていた。至れり尽くせりである。

「（）の生活に慣れちやうと、また旅に出たとき大変だよ」

(へいき どうせ しばらくは 出れない 魔法の剣 見つから ない から)

「うーん。どうだろうね……」

その時、ギヨームが、近づいてきた。

「アガサ様。守り手殿。準備が整いました」

天幕から少し離れて、屈強な騎士たちが整列していた。騎士たちが、正方形の隊列を成している。まるで、四方に縄でも張つてあるかの様に、整つている。

「それじやあ、お願ひします」
「承知しました」

ギヨームが天幕を出る。

「行進始めッ！」

砂漠の風にも負けない、良く通る声で叫ぶ。騎士たちが行進を始めた。動いても、彼らの隊列はまるで乱れない。綺麗な正方形のままだ。

「右ツ！」

隊列が、隊形はそのままに、一瞬のうちに、直角に右へと曲がる。アガサも、騎士団の一糸乱れぬ動きに見入っていた。

ギヨームが、次々と号令を飛ばす。その度、隊列が形を変える。ひし形、長方形、円形、はしご型、そして最後は、正方形に戻った。

「演武！」

皆が一斉に、型を演じ始める。全ての騎士の斬撃が、足さばきが、全て、同時なのだ。

振り回しているのは、背丈ほどある、極太の大剣だ。木剣ではなく、真剣である。一つでも動きを誤れば、隣の同僚の首を飛ばしかねない。

それにも、綺麗だった。どれほどの修練を積んだのか、少年は想像することができた。彼もまた、武術の使い手なのだ。

アガサなどは、椅子から身を乗り出して、眺めている。

やがて、演武が終わる。

「納刀！」

カチン、という、刃が鞘に収まる音が、一つし

か聞こえなかつた。

「これより、模擬戦を始める！ 皆、位置につけ！」
騎士たちが二つに分かれ、移動し始めた。そして、あつという間に、アガサたちを囲つた。天幕の周り、円形の人垣ができていた。

（なに？）

「……何だろうね」

すると、ギヨームが前に進み出て言つた。

「アガサ様。あなたの御命を、貰い受けたい！」

アガサが、口をパクパクさせていく。きよろきよろと、辺りを見回す。周りを取り囲む騎士以外には、砂しかない。アガサは、結局、少年を見た。
「ギヨームさん。あなた方が魔法を隠していたのですね？」

「そうです」

「何故？」

「愚かな質問だ。アツサリアのために決まつてゐる」

「……なるほど」

この屈強な騎士たち一人、一人がその手に、全てを切り裂く魔法の剣を持つたら。背筋が凍る。

「しかし、ギヨームさん。あなた方も愚かですよ。こっちには、歌姫がいる。魔法が、怖くないのですか？」

「アガサ様の声を、私はお聞きしたことが有りません」

「……あー、なるほど……」

「やはり、貴方は魔法を使えないようですね」

（「ごめん バレた ごめん」）

アガサは人前で、手話を使い始める。もうバレたので、今更、隠しても仕方ない。

「……大丈夫だよ」

少年がアガサの背中をさする。

アガサが魔法を使えない事を漏らしたのは、少年なのだから。

アッサリア街を回り、全ての長に会った。少年はその際、それとなくアガサが魔法を使えないことを告げた。そうすれば、魔法を隠している犯人の方から、襲つてきてくれると思ったのだ。

騎士団が隠匿しているだろうと、予想はしていた。アッサリアで魔法の剣について聞き込みを始めた。接触してきたのが、アッサリア騎士団

だつたからだ。宿舎を提供したのも、見張りの意味も有つたのだろう。

少年の予想は当たつたわけだ、やはり、探偵のような真似は、少年には合つていない。荒事で解決するなら、その方が良い。後は、この剣の群れを乗り越えるだけだ。

天幕の外へと、二人で歩み出る。天幕の下に居ると、柱を折られたときに、危ない。

「ここから、動かないでね」

アガサが頷く。

見覚えの有る三人が人垣の中から、進み出できた。つい先日、少年と手合させした若い騎士たちである。

彼らは少年を、守り手さん、と呼んで慕つていた。少年も彼等に、いくつか技を手ほどきした。もしかしたら、友と呼べるような関係なのかも知れない。少年は、そう思つていた。

「貴方の事は尊敬しています。できれば、私たちの手で、決着をつけたい」

騎士のうちの一人が言う。

「君たちの手で決着をつけたら、何なの？」

死んだら結局は一緒じゃないか、と少年は思う。
「……まあ、何だって良いんだけどさ」

三人の騎士が、大剣を抜く。対して少年は無手である。僅かに腰を落とし、重心を低くする。

騎士たちが、走つて距離を詰めてくる。そのま

ま、三人同時に、斬撃を放つた。軌道が絶妙だ。一切、交錯しない。しかし、全ての切つ先が、少年の急所、胸、首、臍へと伸びてくる。決まつた、と騎士たちは確信していた。しかし、その手ごたえの無さに驚く。まるで、煙でも斬つたかのよう

な、感触だ。

少年は騎士たちの、予想もしない方向に跳んだのだ。つまり、前である。迫りくる斬撃に向かって、頭から飛び込んだのだ。騎士たちがまだ、斬撃を放ち切る前に、その隙間を、搔い潜つた。騎士たちからは、少年は消えて見えた。斬撃に飛び込んだ勢いそのままに、騎士たちの背後へと走り抜けたのだ。ここで、少年は腰に括つた短剣を抜き、逆手に構える。騎士たちが、少年の姿を探して、振り向く。その時には、首に、深い切れ込みが入つていた。三

人が同時に、砂に倒れる。びくびくと溢れる赤い血を、乾いた砂は瞬く間に吸い取つてしまつ。

取り囲む騎士たちの、空気が変わつた。かつて訓練の時に少年が見せた実力は、彼の本領でないと、気づいたのである。

「うろたえるな！ 数はこちらが上だ！」

すかさず叫んだのは、ギヨームだった。浮足立ちかけた騎士たちは、落ち着きを取り戻す。少年は内心、舌打ちした。ギヨームが居なければ、今のうちに、囲みを突破できたかもしれない。

「剣牢の構え！」

ギヨームが号令を飛ばす。すると、囲みの中から、二十人ほどの騎士が前へと出でくる。少年はアガサの傍で、様子を伺つていた。陣形を汲まれる前に倒すのが基本だが、アガサの傍を離れるわけにもいかない。

騎士が、アガサと少年を、丸く囲む。皆、大剣を身体の真正面で、切つ先が天頂を差すように構えている。少年がどこを向いても、大剣が規則正しく並んでいる。まさに剣の牢だ。

騎士たちが作る円の中に、アガサと少年は居た。騎士たちは一定の速さで横に移動する。円を回すことで、的を絞らせにくくしていた。そのまま騎士たちは、徐々にその円を狭める。

一人の騎士が倒れた。少年が、手首の筋肉だけで、短剣を投じたのだ。それが、騎士の喉元を射抜いた。一切の予備動作の無い投擲に、騎士たちは、誰一人として反応できなかつた。

しかし騎士たちは、仲間が突然、血をまき散らして倒れたのに、一糸乱れない。剣牢を組み続ける。

「……嫌に、なるよ」

少年は呟く。再び、投劍。見事、一人の騎士の喉元を射抜いた。しかし、騎士たちは乱れない。短剣の数には限りがある。何本も投げるわけにはいかない。

騎士たちは、死を恐れていなかつた。

それって、そんなに簡単に克服できるものなんだつけるかな、と少年は思う。

少年が、短剣を抜く。そして、投擲の構えを取る。もちろん、投げはしない。ただ、圧力をかけ

るだけだ。この短剣を投げれば、お前らのうち、誰か一人は死ぬんだぞ、という圧力である。敢えて、重心をずらしたり、視線をさまよわせて、動搖を誘う。

しかし、騎士たちは、一切、乱れない。一步、また一步と、距離を詰めてくる。じわり、じわりと距離を詰めてくるのが、いやらしい。走つて迫るなら、多少の、隙間は出来たかもしれない。少年は必死に、隙を探す。

少年が、投擲の姿勢を解く。両手に、短剣を構える。

片腕で、アガサを抱き寄せる。アガサが、少年の胸板に唇を当てる。その動きで分かつた。
(ごめん)
「……大丈夫」

距離は着実に詰まる。そして、剣牢が完成した。

騎士たちは、互いの肩がぶつかるか、ぶつからないかという間隔で、剣を構えて居る。団みの半径が、大剣の間合いよりも、僅かに狭くなつた。

合図は無かつた。しかし、一斉に、騎士たちは一撃を放つ。ある者は振り下ろし、ある者は突き

込む。全ての斬撃が、美妙に異なる軌道を描いて、

少年たちに襲い掛かる。

二十近い大剣が、鳥の巣のように少年を取り囲んだ。血が、大剣の刃を伝う。その様子は、さながら薔薇のようであつた。

しかし、少年は傷を負いながらも、生きていた。

彼の腕の中の、アガサに至つては無傷である。

躰せる斬撃は、最小の動きで躰し、弾けるものは短剣で弾いた。残りは、身体に括つてあつた短剣や、鉢付きの靴で受けた。それでも、よけきれないものは、何とか急所だけは外した。

少年の体に、刃が何本か突き刺さつていた。冷たい。鋼は冷たいのだ。体の中に、氷柱を埋め込まれたような感覚だ。容赦なく、熱を、命を奪い去つていく。

しかし、その冷たさもすぐに消える。燃えるような激痛が襲つてくる。灼熱の砂漠において、その熱さをなお、はつきりと感じる。

ただ、それでも少年は生きていた。

騎士たちは、目を疑つた。少年が、微かだが動いている。急いで、止めの一撃を見舞わなければ。

騎士たちが、大剣を握る手に力を籠める。

その時、少年は動いた。身体から流れ落ちる血を、跳ね飛ばしたのだ。それが何人かの騎士たちの、目に入る。視界を奪われた騎士が、慌てて剣を動かす。すると、他の騎士の動きを邪魔することになる。

緻密な連携は脅威だ。しかし、一か所が崩れると、全体に影響が及ぶ。

騎士たちの動搖は、手を一回打ち合わせるほど、短い時間だった。その間に少年は、二人の首を跳ね飛ばした。

更に違溢れる。流れ落ちる深紅の液体を、少年は短剣の腹で受けて、まき散らす。騎士たちの視界を奪う。

密集していくはずい。ようやく騎士たちが距離をとつた時には、剣牢を組んでいた、半数が倒れていた。生き残つた彼らも、一旦、後ろに下がる。

対する少年も無傷ではない。

切り傷が数か所。そのうち一本、左腕の傷は、深い。短剣を吊つていた剣帯で、傷口を縛

る。あばら骨も、二本、折れていた。身体に括りつけた短剣で受けた時、衝撃は殺しきれなかつたのだ。

ざつと、辺りを見る。騎士たちは、未だ、三百人近く残つてゐる。

もう二回。下手したら一回。同じことをされたら、たぶん死ぬだらうな。少年はそんな事を思う。

(ボク、ダメだよなあ……)

アガサは少年の服を掴んだままで、自分たちを遠巻きに囲む騎士たちを見る。

深い藍色の空に、星が浮かぶ。太陽が、砂漠の地平線に触れようとしていた。騎士たちの影が、長く伸びる。それが怪物みたいだつた。ほつんと二つ、寄り添つてゐる影は、アガサと少年のものだ。

「……あー、その、アガサ。頼みが有るんだ」

(なに ?)

「……歌を聞かせて」

(声 無いよ)

「大丈夫。音なんて出なくたつて良いんだ」

アガサが頷く。そして、立ち上がつた。腕を広

げ、大きく息を吸い、目を閉じる。それから、ゆっくりと歌いだした。

「……アガサ。良い歌だね」

アガサの口からは、当然、ヒューヒューと、掠れた音だけが漏れる。魔法を操るはずの歌声は、一切、聴こえない。

しかし、その時、風が吹いた。魔法ではない。

天然の風だ。砂が舞い上がる。

灼熱した砂漠の大気は、日が陰ると急激に冷やされ、上空の冷たい空気が一気に流れ込む。その時、強烈な風が起ころう。少年は、訓練の時に体験済みだつた。

騎士たちは戸惑う。その渦巻く風の中に、もしや歌姫の声が混じつてゐるんじやないか。無いとは言い切れない。歌姫が、魔法を使おうとしているかもしれない。騎士たちは囲みを解かないが、及び腰だ。

「うろたえるな！ 奴に魔法は無い！」

ギヨームが叫ぶが、今度は効果が薄かつた。少年が、一人で十人以上を殺してゐたからだ。

渦巻く風に吹き上げられた砂が、幾重にも引か

れた幕のようになつていて。その陰に隠れながら、少年は駆けた。手当たり次第、視界に入った騎士を斬りまくつたのだ。

「うおおおおおおおお！」

初老の騎士が、少年に気づいたらしい。大胆にも打ち掛かって来た。少年は、思わず舌なめずりをする。

短剣を一本、投じた。それが、吸い込まれるように、突撃する騎士の喉と目を射抜いた。突撃の勢いそのままに、騎士は転がりながら砂の上に倒れた。それきり起き上がらない。

この状況を、アツサリア騎士たちはどう思つただろうか。薄暮の中、砂に紛れて疾走する少年を、騎士は認識できていなかつた。だから彼らは、魔法だと思つた。超常の力によつて、騎士たちが倒れていくのだ。騎士たちが、思わず後ずさる。

円陣の中心で歌い続け少女。その姿は、確かに、

仕掛けが割れている少年からしてみても、神々しいものを感じた。

後、一押しだ。

少年は駆けた。姿勢を低く、できるだけ低くし

て。地を這うように駆け抜けた。アガサの傍を離れるのは怖かつた。しかし、この機を逃せば確実に死ねる。

少年は駆ける。一人でも多く、殺すために。

地面から、少年が飛び出して來た。ある騎士は、そう感じた。すれ違いざま、その騎士の頸下を短剣で撫でていく。少年はそのまま駆け続けた。

太陽が、水平線にかかる。この暗さも、少年に味方した。もはや、騎士の戦列は崩れていた。騎士たちは少年を認識できていなかつた。ただ、魔法だ、と思う。得体のしれない魔法で次々と仲間が斃れていく、と思う。

中には、アガサに斬りかかる者もいた。しかし、そういつた輩は、アガサに集中しているので、逆に与し易かつた。少年は背後から、簡単に短剣を喉元に突き刺せた。間に合わないときは、短剣を投げた。

一人の騎士が逃げ出した。この時、完全に勝敗が決まつた。

一人逃げだせば、後は早い。続いてもう一人、二人、逃げ出す奴が現れた。水が手の平から零れ

落ちるよう、敗走が始まる。

それでも、その場に踏み止まって、戦おうとする者もいた。少年は、そういった者を優先して狙つた。

少年は、駆けまわりながら思う。魔法。という超常の存在を前にして、踏み止まろうとする者が、こんなにもいるのか。少年にとつてはそれが驚きだつた。

踏み止まつた騎士は、声を張り上げて、戦列を維持するよう訴える。そして、剣を構え、周囲を見回す。懸命に、状況を把握しようとしている。

ただ、勇敢な彼等も、頭數が揃わなければ、少年に敵わない。少年は、彼らの背後から忍び寄り、首筋に、刃こぼれした短剣をねじ込む。後半は、もはや戦いというより、作業のようだつた。

もういいか、と少年が速度を緩めた時だつた。少年は、背筋に、チリチリと妙な感覚を感じた。少年の経験上、この感覚はよく当たつた。

少年が振り向く。砂煙の中、アガサに向かつて猛然と突貫する影が有つた。少年は目を細める。あの巨体。ギヨームだ。もう、間に合わない。少

年の足でも、無理だ。

少年は、手に持つた短剣を投げた。これが、最後の一本だつた。そして、その一本を外した。ギヨームが咄嗟に、身体を捻つたのだ。

(大した勘だよ)

少年は舌を巻く。

短剣は、ギヨームの首を僅かに逸れ、肩当てに弾かれた。しかし、ギヨームの突貫する速度が僅かに緩む。

間一髪で間に合う。アガサに、抱き着いて、押し倒す。幸い、下は柔らかい砂だ。少年とアガサは、もつれるようにして地面を転がる。その上を、巨大な鉄塊、大剣が通り過ぎて行つた。

「あなたの負けだ。剣を置いてください」

起き上がりざま、少年は宣告する。それでも、ギヨームは大剣を振るつた。少年はアガサを抱えたまま、飛んで躰す。

暴風のような連撃を、少年は何とか搔い潜る。

(鋭い……)

今までやり合つたアッサリアの騎士の中で、一番、強い。おまけに少年は、素手だ。アガサを抱

えたままでは、そう長くは持たない。

ついに、ギヨームの大剣が、アガサに掠つた。

彼女の羽織った風よけに、切れ込みが入る。恐怖に、驚きに、アガサの顔が歪む。

「……お前、殺すぞ」

少年が呟く。それでも、ギヨームは剣を振るい続ける。

少年の足が、砂に取られた。

横薙ぎの一撃。鉄の刃が、アガサの肩に触れる。

あと、瞬き一つする間に、大剣はアガサにめり込む。すかさず、少年が自分の腕を、アガサと刃の間に挟みこんだ。切つ先が、少年の右腕に食い込む。

筋肉の繊維の束が、ブチブチと絶たれていく。少年はその感覚に集中した。時間の流れがゆつく感じられた。少しづつ、少しづつ、大剣が食い込む。

(…………ここつ！)

一瞬、ほんの僅かに、大剣が遅くなる。刃が少年の骨に達したのだ。少年は、この瞬間を逃さなかつた。自分の骨を使って、大剣の軌道を逸らし

た。勢い余つて、ギヨームの身体が、泳ぐ。

(だいぶ、血をながしたなあ……)

少年は、どこか他人事のように、身体の様子を確認した。彼にしてみれば、自分の身体も、短剣も、あまり違わない。抱えた、アガサの身体が熱い。彼女の息遣い、筋肉の震えが、伝わってくる。

「アガサ、ごめん」

少年がアガサを、後ろに突き飛ばした。彼女が、砂原に転がる。少年は、アガサを背後に背負う形で、ギヨームと対峙する。これでアガサの危険は減つたし、少年もある程度、自由に動ける。

少年の身体はひどく冷たかつた。かなり血を流した。死がだいぶ近づいている。

だから何、って話だけだ。少年は思う。

ギヨームは剣先を少年に向けて、地面に水平に剣を構え、そのまま突貫した。鎧を着込んだ大男が、丸太のような剣を突き出して、突進してくる。少年は無手だ。しかし、少年の真後ろには、アガサが居た。彼が躲せば、アガサが轡き殺される。それが、ギヨームの狙いだった。

「うおおおおお！」

ギヨームが怒声を上げる。大質量が迫つてくる。

切つ先は真つすぐに、少年の喉元に伸びる。

もちろん少年に、避けるつもりは無い。少年は、片足を強く踏み込み、膝近くまで、砂に埋めた。

腰を低くし、重心を落とす。下半身が、石像の如く固定された。そのまま、腰に添えられた、左拳を、真上に振り抜いた。

少年の拳が、大剣の腹を捉えた。鈍く硬い音が響く。まるで、巨岩にでもぶつかったかのようだ。大剣が、宙へ跳ね上げられ、ギヨームの突進が止まる。

速度任せに、拳をぶつけるような、ただの打撃ではない。重心の移動、腰の捻り、関節のバネ、筋肉のしなり。全ての運動の勢いを、余すことなく、拳に集約させる。

この特殊な打撃は、素振りするだけでも困難だ。それを、動いているものに当てようと思えば、少年でさえも不可能に近い。しかし、予め軌道が分かっているなら話は別だ。

少年は、アガサを囮にしたのだ。アガサを背負うように立てば、ギヨームは突っ込んでくると読

んでいた。

少年は、がら空きになつたギヨームの懷に飛び込んだ。拳は使えないのに、鳩尾へ、膝蹴りを見舞う。

「くつ……」

ギヨームが地面に膝をついた。

続いて、腕に廻し蹴り。手の力が抜け、大剣を取り落とす。少年は、すかさずギヨームの背後へと回る。体当たりで、地面に押し倒す。そのまま、ギヨームの右腕を極めて、のしかかる。これで、無理に立とうとすれば、右腕は折れる。

少年は、しばらくそのままでいた。そうして、流石に上がつていて息を、整えた。それから少年が訊く。

「ボクたちを殺そうとした理由は、見当がついています。魔法を隠したかったんですね?」

「…………守り手殿の実力……見誤りましたな」太陽が一瞬、眩しく光る。それが最後の輝きだつた。地平線に完全に沈む。西の空が、静かに赤く染まつていた。風はとうの昔に止んでいたようだ。

「……殺さないのか？」

「もちろん、殺しますよ」

少年は淡淡と言う。

「だけど、その前に質問に答えてください。何故、

魔法を隠したのですか？」

「……存知のはずだ。魔法がいかに強力である

のか」

「それは、もちろん。ただ、ボクたちと、歌姫と守り手と戦つてまでも、魔法を欲しかったのですか？」

「アツサリアは弱い」

「見た感じ、そんな事は無いと思いませんけどね。豊かで、物に溢れている」

「金は有る。しかし、武力が無い」

「ああ、確かに」

軍隊を維持するには、食料も、水も、場所も要る。その上、平時は完全なただ飯喰らいだ。この不毛の地に、大規模な軍隊を、常駐させる余裕は無い。

「アツサリアは、ここらの国の、便利な財布だ」
「アツサリアの外交方針は、要するに八方美人だ。」

武力がないから、どの国とも事を構えたくない。
そのため、どの国にも良い顔をする。

それ 자체は良い。しかし問題は、周辺で戦争が起こった時だ。

そうなれば、各国は、金の有るアツサリアから戦費を調達しようとするはずだ。ある二国が戦を起こしたとして、アツサリアにしてみれば、そのどちらも友好国なのだ。どちらかを援助する訳にはいかない。援助すれば、もう片方の国を裏切つたことになる。

ならば両方の国を援助するか、もしくはどちらの援助も断るか。その場合、両方の国を敵に回すかもしれない。

戦争を始める国が二国だけとは限らない。これが、複数の国同士の間で戦が起きたら、事態はますますやっこういことになる。

ただ、アツサリアが武力を持てば、金を要求されても拒否することができる。そもそも、どこの国にも良い顔をする必要が無くなる。

「……だとしても、魔法は、人間の意志で使つて良いものではないんですよ」

「そんな事、誰が決めた」

「お気持ちは、分かりますけど」

「貴様には何も分からん」

「これでも、いろんな国を見て回っているんで」

「貴様には分からん。……帰る場所を持たぬ、名無し風情が！」

その時、ギヨームが少年を押しのけて、立ち上がった。

少年がギヨームとする。彼は確かに、ギヨームの右腕を極めていた。ギヨームが立てるはずがない。

「お前」

少年が極めた腕は、肩までしかなかつた。その腕は、肩ごと切断されていたのだ。鎖を編んで作つた、鎧までも斬られている。

ギヨームは左手に、細い剣を持っていた。彼は自ら、右腕を断つたのだ。身体と別れた右腕は、未だに暖かい。滑らかな切断面から、血が線になつて垂れている。

「アッサリアのために！」

ギヨームの突き込み。

切り落とした腕と、流した血の分だけ、ギヨーム

ムの身体は軽くなつていた。その突きは、今まで一番、速く、鋭い。切つ先が、アガサへと伸びる。

少年が、アガサとギヨームの間に、割つて入る。ギヨームの突き出した腕を絡めとり、突きの勢いをそのままに、背負つて投げる。

「アガサ！ 平気？」

アガサが頷く。しぶとい相手だつた。少年は額の汗を拭う。

ふと、少年は背後に殺氣を感じた。

ギヨームがよろよろと立ち上がるうとしていたのだ。しかし、立つことだけしか、できなかつた。血を流し過ぎたのだ。右肩が、鎖骨の辺りから無くなつていて。

荒々しく息をしながら、それでも少年を睨みつけている。

それも、長くは持たなかつた。やがて、膝をつき、そして、倒れた。まだ生きているのか。しかし、もう助からぬだろう。

だが、少年はしばらく構えを解けなかつた。ギヨームの死に様に感じたのは、恐怖だつた。

アガサが、少年の顔をのぞき込んだ。

「……」「ごめん。もう、終わったから」

少年が、ギョームの傍にしゃがみ込む。確かに死んでいた。それを確認すると、少年もその場に、

寝転がりたくなった、がそうもいかない。

少年は、ギョームが持つ剣を、拾い上げた。それはアツサリア騎士たちが振り回していた大剣と比べると、遙かに華奢だ。針金のようだ。

ただ、刃の輝きは異常だ。

アガサが、少年の袖を引く。

「あ、ごめん」

少年は、剣に見惚れていた。余りにも美しかった。視線をその切つ先から外すことが、苦痛でさえあつた。

「やつぱりこれ、魔法だよね？」

アガサが頷く。だいたい、寝たままの姿勢で鎧ごと腕を切斷するなんて、人間業じやない。

「一応、確かめておこうかな……」

少年は、亡骸になつていていたギョームの、肩当てを剥がす。板金を叩いて整形してある。なかなかの逸品だ。アツサリア騎士団の団章が刻まれてい

る。

少年はそれに、切つ先を突き立てる。するりと、刃は、抵抗もなく刺さつた。

「うわあ……」

この切れ味。

背筋がぞくぞくする。

無手であつたことが、却つて幸いしたのかかもしれない。短剣を持っていたら、腕を絡めて投げるなんて、危なつかしい受け方はしなかつたはずだ。より確実に、短剣で弾こうとして、魔法の剣に、短剣ごと貫かれていただろう。

（やつぱり 魔法の 剣）

（相変わらず、物騒な品だよ）

（すごい 切れ味）

「……まあ、それも有るけどさ」

アガサが不思議そうな顔をする。

少年は、この剣を持った時、戦う自分を想像した。このボクが、全てを切り裂く剣を持ったたら。そんな想像をしてしまつた。魔法の力に、呑まれかけたのだ。

魔法を勝手に使つてはいけないことは、少年が一番、知つていた。

(行こう 寒い)

アガサが言つた。既に砂漠は、完全に夜の中に沈んでいた。しかし、砂漠の夜は、意外と明るい。なんせ雲一つ無いので、空は全面、星が張り付いている。

「そうだね」

アガサが、少年に手を差し出す。少年はその手を取つた。

4

帰り道も、少年たちは騎士に襲われた。残党が、待ち伏せしていたのだ。不意を突かれたが、少年は難なく撃退した。精緻に組まれた陣形こそが、アッサリア騎士の強みだ。個々の力は、少年に遙かに劣る。苦し紛れの突撃など、手負いでも怖くない。

「驚いたよ。あんなに、こつぴどくやられたのに、また襲つてくるなんて」

アガサが頷く。

「鬼気迫るものがあるつているか、なんていうか

……

ギヨームの死に様が、思い浮かぶ。アッサリアを守るという意思が、騎士団の強さなのか。少年には無いものだつた。

実際、少年は、ここまで危うい展開になるとは思つていなかつた。訓練に参加して、そう判断した。ところが、いざ斬り合いになると、彼らは実力以上の力を發揮した。アガサに助けられなれば、死んでいた。

完全に読み違えた。アガサを危険に曝したことが、情けなかつた。完全に少年の失敗だつた。それも、だいぶ間抜けな類の失敗だ。

アガサが魔法を使えない事をバラすべきではなかつた。もつと他にやりようが有つた。少年は、その事ばかり考えていた。

魔法が使えないことがバレたのは自分のせいだ、とアガサに言うべきか、少年は迷つた。自分の中だけで抱えているのが、辛かつたからだ。しかし、思い留まつた。

打ち明けて、アガサの信頼を無くす事が怖かつたからだ。

「アガサ。ごめんな。危ない目に遭わせて」
それだけ言う。アガサは、首を横に振った。

(大丈夫)

「……そう」

少年の、ごめんの意味を、アガサは正しく理解していない。アガサは、少年が自ら騎士団に襲われるよう仕組んだことを知らないからだ。それでも、少年の心は、幾分、軽くなってしまった。

(それより 今日は どこで 寝る ?)

「あ、そうか。騎士団の宿舎は使えないのか……」

少年たちは、結局、その辺の安宿に泊まった。流石に、騎士団の駐屯所には泊まれない。寝首を搔かれたら、笑えない。

(ボロい 汚い)

「……我慢してよ」

貴族のような暮らしに慣れてしまったアガサは、普通の宿では満足できない様だった。

「明日か、明後日には出発するんだよ？ 早く慣れないと、この先、大変だよ」

アガサが、ため息をつく。ひゅー、と掠れた音がした。

翌日、アツサリアの一角、泉の傍の料理屋で、長の会合が開かれていた。しかし、いつまで経つてもギヨームがやつてこない。商人の長、探鉱者の長、鍛冶師の長は首を傾げる。傾げながらも、卓上の料理はみるみる減っていく。

そんな時、少年とアガサが現れた。

(美味しそう)

「……食べちゃダメだよ。ところで、皆さん、お土産です」

少年が、卓上に、腕輪を置く。素材はただの鉄だが、凝った作りをしている。輪の内側に、剣の意匠が刻まれているのだ。それを見て、鍛冶師の長が言った。

「……それは、俺が作つたものだ。どこでそれを？」
「ギヨームさんを殺して、奪いました」

それからは、早かつた。どうしようもないと悟った長たちは、潔く魔法の剣の隠し場所を白状した。

それは、砂漠をしばらく歩いた所に有つた。かつての坑道跡である。

「……魔法は、この先に有ります」

「分かりました。案内は任せます」

少年は、案内の探鉱者の長の、手首を縛つた。変な氣を起さないようにするためだ。いざとなつたら、人質にしても良い。

少年たちは、下へ、下へ、と坑道を降りていく。

既に、帰る道は分からなくなっていた。そのくらい、坑道は入り組んでいた。

罠に嵌めるなら、もつてこいだよな。少年は思う。一方で、アガサは楽しそうだ。自ら角灯を持っている。

「探検、気分なのね……」

アガサが頷く。ふと、探鉱者の長が、立ち止まつた。

「こちらです」

目の前に、木製の扉が有つた。比較的、新しそうだ。

「開けて、先に入つてください」

「……はい」

長は、手首を縛られたままで、苦労しながら扉を開けた。

その先に有つたのは、鍛冶場だつた。設えを見

れば、武器を造るための工房だと分かる。なるほど。こんな所に有つたら、見つからないはずだ。

「アガサ。どれが魔法？」

アガサは首を振る。

（全て 違う）

少年が長を睨む。

「……い、いや。ここに魔法は有る。嘘じやない。おい！ 出てこい！ 早く！」

すると、部屋の奥から、大男が現れた。面長で、ボサボサの長髪を後ろで一つに束ねている。大きなあくびを一つ。

「やー、どうも、シロウさん。そちらの人は？ つていうか、何で縛られてるんです？」

（この人 魔法だ）

アガサが少年の袖を引っ張つた。

「人が？」

アガサが頷く。人が魔法を宿すことは、珍しいが、有りえない事でもない。

「あー、バレちゃったんスね」

男が頭を搔く。パラパラとふフケが落ちた。

「あなたが、あの剣を打つたんですか？」

「そうスネ。で、俺はどうすれば？」

「取り敢えず、すでに打ちあがつてある剣を、見せてもらえますか？」

「こっちです」

工房のさらに奥に、もう一部屋、有つた。大小様々な剣が、棚に並んでいた。しかし、まともに使えそうな剣は、少年が思つてはいたより少ない。「いやー、ちやんとした、魔法の剣が打てるようになつたの、最近なんスよ。それも、小さいやつばつかりで。騎士団が使うような、でつかい奴は、まだまだ打てそうにないかな」

男が、今までで一番の出来だ、という剣を取り出した。確か昨日、ギヨームが使つてはいた魔法の剣は、これくらいの大きさだつたはずだ。

「これで、全部ですか？」

「そうつす」

「アガサ。どうしようか？」

（剣を 打つ 所が 見たい）

アガサが、ちやかちやかと手を動かす。少年は、その旨を男に伝える。

「よござんす」

男は、さつそく炉に火を入れた。煌々と燃え盛る、炎の赤色は、実は何種類もの赤が混ざつている。

「炎つて凄いよね。俺、好きでさ」

男が、炉の中を見つめながら言つた。彼の顔を、炎が照らす。

「魔法について、どう思います？」

「別に。……できれば、自分の力で、名刀を打ちたかったかな。……いや。これも俺の実力なのか？ま、どうでもいいけど」

鍛冶が始まつた。細長い鋼の板を、男は、炎に曝す。鋼はみるみるうちに、灼熱に染まつた。

男が、炉から鋼板を取り出す。それを、鎧で打ち始める。何度も、何度も、ひたすらに鎧を振るう。

少年は、鎧を打つ響きが、妙に澄んでいることに気づいた。まるで、水晶を弾いているような、そんな音だ。しかも、毎回、音階が微妙に異なる。音の伸びも、一音一音、違うのだ。

（そうだ。これは音楽だ）

少年は気づいた。彼は、横に立つアガサを、ち

らりと見る。彼女は目を閉じて、鎧の奏でる音楽に聴き入っていた。

魔法は、音楽によって記録され、それを奏でることで発現する。鎧と鋼がぶつかる度に生まれる音の、音階が、音質が、強弱が、織り成す旋律が、魔法を組み上げるのだ。

アガサは熱心に、その音を聴いている。彼女は歌姫だから、一度聴けば、その音楽を完全に記憶する。ただ、声が出ないので、その旋律を再現することはできない。だから、魔法は使えない。

今回は、鎧を打つ響きが、魔法を奏でていた。この刀工は、果てしない研鑽の末に、魔法を得たのか。それとも、持つて生まれたものか。音を聴くだけでは分からぬ。

鍛造は、その後も続いた。

そろそろ日が暮れたんじやないか。空は見えないけど。少年がそんな事を考えはじめたころ、アガサが目を開けた。

(一周したもう大丈夫)

〔そつか〕

男は、一心不乱に鎧を振るい続けていた。額を、

玉のような汗が流れ落ちる。

(後は任せる)

〔…分かつた〕

アガサだけ先に、工房を出た。少年としては、アガサから目を離したくなかったのだが、仕方ない。

刀工が槌を振るう。その度に、鋼の板から、澄んだ音が溢れ出す。少年は、もう少しこの音を聴いてみたいと思った。

〔…魔法は、人間の手に余るんですよ。残念だけど〕
少年も、なるべく手早く後始末をすると、アガサの後を追つた。

5

既に完成していた魔法の剣は、塩水に浸した。切れ味は神懸かっていたが、所詮は鉄である。当然、鏽びるし、鏽びたらまるで斬れない。その後は砂漠に捨てた。魔法の剣は、風に削られて、そのうち、大砂漠の一部になる。

アガサと少年は、ルグルー大回廊を、南へと歩いていた。

(疲れた 馬車に 乗り たい)

「そんなお金、無いって」

商人にしてみれば、人間を運ぶより、香草やら、工芸品やらを、運んだ方が金になる。もちろん、アガサが大金持ちなら話は別なのだが。

「おんぶする?」

アガサが首を振った。

(嫌だ バカ)

「そう? 辛くなつたら、いつでも言つてね」

少年の膝の裏を、アガサが蹴つ飛ばした。

それからしばらく、二人は無言だつた。四六時中、一緒に居るのだ。喋ることも、尽きてくる。だから二人は、無言でいることがよくある。二人にとつて、沈黙は苦にならない。

(名前の こと 気にして いる ?)

ふと、アガサが言つた。

「いや、別に。……何で?」

(最近 何か 考えて いた カら)

考えていたのは、別の事だった。アガサを危険

に晒してしまつたことだ。

「……いや。大丈夫だよ。名前の事は、気にしてない」

(分かつた)

少年は名前が無い。魔法で、名前を消されたからだ。頭の中から、名前を引っこ抜かれた。すると、芋づる式に、名前に関連するような記憶も、抜けていった。

例えば、出身地とか、家族とか、恋人とか、年齢とか、前の職業とか、好きな食べものとか、口ずさんでいた歌とか、夢とか。そういうものが全部、抜けていった。

読み書きや、計算、匙の使い方等は、覚えていた。しかし、自分の出自の事となると、何一つ分からぬ。

守り手が、旅の途中で、歌姫を裏切らないようにするためだ。そして、守り手が歌姫を脅して、私欲のために魔法を使う事を防ぐためでもある。魔法を集めれば、やがて名前は返してくれるらしい。だから守り手は、歌姫を守り続けるしかないのだ。

「……いやね。アツサリア騎士団、強かつたなつて。最近、そのことを考えてた」

名無し風情が、とギヨームが叫んだ。彼はこうした背景を知っていたのだ。少年が無くしたようなものが、案外、アツサリア騎士団の強さなのかかもしれない。

「危ない目に遭わせちゃったね」

アガサが、少年の膝の裏を、蹴つ飛ばす。

（ 大丈夫、だから ）

「ごめん、ごめん」

（ 次は、もっと水が有るところがいい 綺麗な湖の近くで魚を食べたい ）

アガサが饒舌に語る。暑いだろうに、チャカチヤカと手を動かす。話題を逸らそうとしているのだ。そんな様子が、危険を招いた張本人にとつては、たまらない。

「……このまま行くと、ブドウの名産地だね」

（ ブドウ酒 ？ ）

「有ると思うよ。そりやね」

（ 早く 行こう ）

アガサの歩く速度が速くなる。

少年は、自分が守り手になつてから、ブドウ酒を飲んでいなかつた事に気づいた。知識として、美味しいものだとは知つてゐる。

「……ブドウ酒ね。ボクの好物なんだろうか」

少年は知らないのだ。彼が何を愛し、何に幸せを感じ、何を求めたのか。そして、何故、声なき歌姫の守り手となつたのかを。

いずれ、全てを思い出す時が来るかもしれない。ただ、今、分かっているのは、人よりも腕が立つことと、アガサをちょっと良いな、と思つてゐることくらいだった。

（ 早く 早く ）

アガサが振り向いて、少年を急かす。

ルグルー大回廊も、もう半分を過ぎた。道は、真つすぐ南へと続いている。とりあえず、急いだところで、ブドウ園まで、あと七日以上も掛ることを言うべきか。少年は、アガサの後を追つた。

終わりに

手に取つていただき、そして、ここまでお読みいただき誠にありがとうございました。もし楽しんでいただけたのなら、それが我々の至上の喜びです。

我々東京農工大学文芸部員一同、再びお目にかかる日を楽しみしております。

重ねて、誠にありがとうございました。

意見、感想等ありましたら、気軽に後述のアドレスまでお寄せください。

代表：ASA

漆 第十六号

一〇一七年 五月七日

東京農工大学文芸部

noukoubungei@gmail.com
印刷：ポプラス様